業務資料No. 574

ウィトマルスン入植地の25年

—Witmarsum in Paraná—

1980年8月

国際協力事業団

3
4
S
RY

移計調
JR

はじめに

本書はブラジル・パナマ州にあるウィトマルスン入植地の入植25周年を記念して編さんされたものである。

ウィトマルスン入植地は、キリスト教メノー派の人達によって創設されたものであるが、入植者達は多くロシアからやって来た。メノー派は北部ドイツ、オランダに生まれたキリスト教の一派であるが、独自の伝統と文化をかたくなに守り通すことから、周辺社会との協調性を欠き、北ヨーロッパ、ロシア、北米、メキシコそして南米諸国と放浪の年月を重ねた。

南米に定着したメノー派の人々は、特殊な閉鎖社会を形成しながらも、強い信仰心と相互扶助の精神に支えられ、多くの困難を克服し夫々の国で立派な入植地を生み出している。集団入植地を創り、主として農耕に従事している点から日本人入植地と比較し、これを研究することは今後の移住業務推進のため参考になる点も多いと考えられる。

入植地の指導者ばかりでなく、一般の入植者やこのウィトマルスン入植地に関係した多くの人々によって綴られた本書は、人間が移住という多難な行為をやりとげ、新天地に定着してゆく様をわれわれに生々と伝えてくれる。業務の参考となれば幸いと考えこゝに印刷した。

昭和55年8月

移住計画調査部長

JICA LIBRARY
1024406[9]

ウィトマルスン入植地の25年

—Witmarsum in Paraná—

○クラウエルのウィトマルスン入植地の歴史
○パラナへの転住および新ウィトマルスン入植地の開拓
○個人体験記

著作・編集
ペーター・パウエル・ジュニア
1976年12月

国際協力事業団
受入月日 '84. 3.19
登録No. 00946
703
23.4
EPS

目　　次

序章（25 年を顧みて）　ペーター・パウルス・シニア …… 1
モスクワ門前の奇跡　ペーター・フリーゼン …… 4
1　原生林の開拓者達 …… 7
(1)　クラウエルの詩情 …… 8
(2)　豊かな猟場 …… 9
(3)　セラ山最後のバクー　ハインリッヒ・ハルダ …… 10
(4)　原生林の農民 …… 11
(5)　協議会の設立 …… 11
(6)　クラウエルのウィトマルスンと新ウィトマルスンの想い出
　　エリザベート・テウス …… 13
2.　パラナへの移動 …… 15
(1)　新しい居住地か？ …… 15
(2)　土地を求めて …… 15
3.　カンセラ農場の買収 …… 18
(1)　レースは開始された …… 19
(2)　救いの手 …… 21
(3)　忘れるなかれ！ …… 23
4　クラウエルの解体 …… 25
5.　パラナのウィトマルスン …… 27
(1)　カンスラの歴史 …… 27
(2)　ドナ・リータ・ダ・カンスラ …… 28
(3)　新ウィトマルスン計画 …… 28
(4)　パルメイラ — 土地と人 …… 30
(5)　ウィトマルスンの名の由来 …… 31
(6)　合い言葉は「前進」 …… 32
(7)　クラウエルとの別れ …… 33
(8)　家畜の群を追ってパラナへ　ヨハン・ヴォークト …… 34

6. 移住地の建設
(1) 経済的成長　ロベルト・ヤンセン …… 36
(2) 厳しい開拓時代 …… 38
(3) ウィトマルスン — 共同体活動の成果 …… 40
(4) 家畜の群 …… 41
(5) 村の分割 …… 42
7 活動する共同体 …… 47
(1) 移住地の電化 …… 48
(2) ドイツ開発サービス …… 49
(3) 自　　治 …… 49
8 協同組合の設備 …… 53
(1) 屠 殺 場 …… 53
(2) 乾燥場とサイロ …… 53
(3) アカルパ（ACARPA） …… 53
(4) 病　　院 …… 54
9. ドルの返済 — 多難な道 …… 56
(1) 25 年経た今日 — 再び土地を求めて …… 56
(2) 学校 — 共同体の支柱 …… 57
(3) 教区民としての生活 …… 60
(4) 布教奉仕 …… 62
10 個人体験記 …… 64
(1) 「聖書と農耕」の由来　アルフレード・パウルス …… 64
(2) 回 想 記　マルタ・エッブ …… 67
(3) 想 い 出　メリタ・ニッケル …… 68
(4) 斯く始まりき　ペーター・クラッセン …… 70
(5) ヤンセン小母さんの人生 …… 72
(6) ウィトマルスンの想い出　Dr．ボストマ …… 73
(7) ウィトマルスンでの体験　Dr．ハーバート・ミニック …… 74
(8) ある開拓者は語る　ニコライ・ペナー …… 77

(9) ブラジル — 私の第2の故郷 フランツ・クリーヴァー …… 78
(10) 調査旅行 デビッド・クーブ …… 79
(11) ウィトマルスンにおける8年間の教師生活 アンナ・バルツァー …… 81
(12) AMAS —ブラジルメノー派教区の支援活動
ペーター・パウルス・ジュニア …… 82
(13) ハマーシュタインからパラナ州のウィトマルスンまでの歩みをふり返って Dr．ペーター・デュック …… 86
(14) パラグァイからブラジルへ デビット・ヤンセン …… 95
(15) 25 周年を祝して
アントニオ・シカリノ・ペレイラ、オスクルド・アンドラ・デ・サット… 96
(16) カンスラ — ウィトマルスン
ペーター・パウルス・ジュニア …… 97
(17) 輝く星の下で …… 98

序章（25年を顧みて）

今日における輝かしい歴史の原動力となった人達は一体誰なのであろうか。

彼等は遙か遠い、無限に日の光りに映えたステップの広がる広大な国ロシアからやって来た。ある者は南ロシア、ウクライナ、クリシヤ、コーカサスからやって来た。また、ある者はウラル、北極地方、西シベリアの故郷をあとにした。あるいは、極東、アムール川流域からもやって来た。ソ連のあらゆるところから、黒海やアソフ海から果ては大平洋に及ぶ全国隅々から、人々は1度にソ連の首府モスクワに参集した。それは何世代にも渡って絶ゆまぬ開拓精神を持ちつづけ、スラブ諸国のステップ地帯を豊かな田畑山林に作り変え、ヨーロッパの穀倉地帯といわれるまでにした農民や難民であった。

赤い革命、殺人集団、荒廃化、飢餓によって生活の基盤が失われ物資が窮乏した。そして今や最後の柱とも言うべき宗教文化団体、最後の自由独立的農民も、スターリンの無謀な政治の為、何百万人もの集団殺人鬼と化し、人々は奴隷のように自由を失ったのである。そして全農業の強制的な集団化が確実に行われ、そのやり方は、かつて無い程に苛酷なものであった。これはカタストロフィーを生じた。何万人もの人々がこの赤い地獄から逃れるため、パニックの様にモスクワへ集結したのである。そのうち自由な西側世界へ行く事ができたのはごく僅かであった。

そしてその中に、自由と平和のある新しい故郷を求めてブラジルへ渡ったひとグループがあった。

このグループはそのほとんどの人々がドイツ系のメノー派信教者である。彼等はまずサンタ・カナリーナの原生林地帯に上陸した。ソ連の国境を越えたとき、ソ連政府は彼等から一文残らずとりあげてしまって何ひとつ持っていなかったが、彼等は我が身を震い起こし、輸送手段もまったく持たず、未だ誰も足を踏み入れたことのない原生林の奥深くへとわけ入った。

初めの1年間はドイツ政府の支援金により生活維持の面で困難はなかった。しかし、ステップの機械化耕作から、手による原生林の開拓に転じたことは、非常な苦難を彼等にもたらした。然し、彼等農民は過去に積み上げた強靭な開拓魂から、屈せずに原生林のジャングルや未知の境遇に立ち向かった。不屈な意志を貫くことで、

彼等は去ってきた故郷には存在しないような規律で統制された移住地組織を20 年を経て生み出した。そしてついにこの広大な土地をひとつの閉鎖的な住民組織によって機械農業地帯に造り変えるという長年の夢を実現する事が出来たのである。1951年6月6日、パラナ州ウィトマルスン植民地には「フアゼンダ・カンセラ」から「南米ウィトマルスム商工会社」が創立された。

先発の植民地であるイビセラマのクラウル（サンタ・カタリーナ州）に対してはドイツ帝国政府は特に積極的に援助を与えた。例えば、人々の尊敬を集めた白髪の大統領フォン・ヒンデンブルクをはじめ、我々がひと方ならぬ御恩を受けたDr. B. H. ウンルー教授、オランダ移民局のDs. S. H. N. ゴルダ牧師そして色々な博愛協会および高邁な精神で尽力された多くの方々。

パラナのウィトマルスンはさらに幅広い支援を頂いている。アメリカ合衆国メノー派教会総務当局の方々、またその代理者、特に、Dr. J. J. ティーセン、Dr. H. A. ファースト、Dr.J. W. フレッツおよびその他の方々の力に依るところは大である。このような方々から与えて載いた御恩御好意は久しくウィトマルスンにおいて称えられた感謝の念とともに思い起こされるでありましょう。

今思い起こせば、この25 年間におけるウィトマルスンの建設および展開のなかには様々な事が起きている。共同体の生活状態、経済、文化、社会福祉や教会に関する我々の喜びと悲しみ、そして期待の裏切りやしっぺ返しなどは、すべて我々の経験の歴史に他ならない。移住地内部の組織の変化、外界との関係、経済的モデルとしてのそれらの影響もあわせて、この書物を通じて若い世代の諸君に、またウィトマルスン植民地の近くはいうに及ばず遠く海を越えて住む友人の方々にも、さらに常にメノー派共同団体に関与しておられる方々に我々の姿を報告したい。

さらにまた、この書により、植民地の現在や遠い将来についても展望を与え、現在の身近な問題、母国語を維持し奨励すること、伝統的財産の維持・統合等々が考察されるであろう。

然しながら、25 年間の共同社会の成果であるウィトマルスン植民地の功績はウィトマルスム住民1人1人に帰属するものである。かつて不毛の地であった辺境地域を重要な農業生産地帯に変えて行った彼等の労苦を知って、次の世代がこれに鼓舞され、刺激となる何物かを握んでくれる事を期待したい。また同時にこの特色

有る移民社会の安寧と共に、我が市パルメラ、我が州パラナ、そして我が祖国ブラジルの末長い繁栄と進歩を願うものである。

ペーター・パウルス・シニア

モスクワ門前の奇跡

最後の合法的移民がロシアの国境を越え、政府により国境が閉鎖されたのちに、胸苦しい静けさに襲われたのは我々メノー派信者も例外ではなかった。我々は党員の演説、新聞、また党員等から直接耳にするなどして、彼等の「5ケ年計画」を知ったが、そればかりでなく、所謂「国民の敵」と称して信心深い農民や土地所有者を撲滅せんと企む意図を聞き及んだのである。

学校では今や宗教に代って無神論が教えられた。人々の口には土地収用や国外追放などの言葉が盛んにのぼるようになった。

私達はモスクワ郊外のメノー派農民の集会の場所でまだ移住する可能性があることを知った。そこで私の両親は、既に1926 年に農地を売却して第14 寄宿舎学校を経営していたが — 私は中央学校で学んでいた —、国外へ出る事に意を決してモスクワへと旅出ったのである。

私には元来この決意はそぐわぬものであった。貧しい両親の息子である私には、オーレンブルグの学校に進学できる道が開けていたのである。私はドイツ語の恩師ハインリッヒ・コスロフスキー（彼は共産主義者である）に相談した。意外にも彼は私に旅出つよう言ったのである。当時、私の住むオーレンブルク地区から足を踏み出そうとする者は誰もいなかった。私の家は貧しいし、なぜ私の両親があの様な大家族で出発しようとしたのかいまもって不可解である。私は、あれはきっと神の御導きにちがいないと考えるのである。

私達の計画に対し忠告が為された。赤い息のかかった書記は嘲笑してこう言ったものだ。「出て行こうとする者は犬畜生だ！」

1929年8月5日 早朝、我々は叔父のコルネリウス・フリーゼンに連れられてプレトリアからオーレンブルグへ向った。私は悲しみにくれながら村の道端に目を走らせた。皆まだ眠りから醒めやらぬときである。私は故郷を再び見ることがあるであろうか。「帰ってくるならば、私に知らせておくれ。そうすれば迎えに来るよ。」と叔父は私達に言った。叔父も私達がロシアから出て行くのだということを信じていなかったのである。駅で2～3時間待たされてやっと切符を手に入れ、鈍行列車に乗り込んだ。8月8日、モスクワへ到着した。そこから馬車で郊外のタユニカに

着き、コルネリウス・ギースブレヒトが賃借していた家の前庭で、夜空の下で一夜をすごした。その後私達は居む所と仕事を手に入れることができた。モスクワへ集るメノー派の人達の数は日毎に増加した。私は駅でスラフグロドからの61番列車でやって来た若者と赤い環状の入ったソックスをはいた少女達と会った。私は即座に判った。彼等は紛れもないメノー派で、私達に帰省を奨めに来たのであった。政府は学生を派遣し、カナダは貧困と失業に溢れていると我々を引き止めようとした。カナダの実情は後でその通りである事が解った。私達は勿論一言も信じる事はなかったのである。ある者は言った「カナダでは朝食にスポンジケーキを食べてしまうということだ。」私はスポンジケーキが大好物だったので大変に興奮した。では、昼食には一体何が出てくるのだろうか？

しかし、政府の答えはいつも"Niet（とんでもない）！"であった。私達は祈りと誓願に明け暮れた。幾多の危険を顧りみずに私達の代表者達がクレムリンに居るスターリンやレコフに会いに何度も出かけて行った。私の兄の語る所では、レーニンの未亡人クルプスカヤ、それにマキシム・ゴーリキの妻カタリナ・パフロフナとも面会して、2、3個の美味しい豚のハムなどを贈り ― 彼女達は託児所をやっていたのだと思う ― 自分達のために政府に取りなしを頼んだという。

そして、ついにモスクワ門前における奇跡が到来したのだ。

10月27日夜、全く突然に、夢にまでみた知らせが舞い込んだのである。「万事完了、明日実行！」この知らせをどんな気持で受け取ったかは、何ケ月もの間祈り待ちこがれた者にしか解らないであろう。私達は、母が浸してくれた下着類をおけから一枚一枚取り出して2枚づつ絞り、袋に詰めた。袋は沢山の物で満杯にふくれていた。

10月28日早朝、私達は駅に着いた。列車がレニングラードへ向って動き出すまで長い時間待たされた。金銭を所持してロシアの国境を越える事は禁止すると知らされ、皆は、列車が果物を売るスタンドに近づくと殺到した。売り台の上に紙弊が舞い降り、人々はこう叫ぶだけであった。「これ全部、果物をくれ！」私は後にも先にも、これほどメノー派の人達が地上の物を求めて躍起になる姿を見た事はない。商人は驚嘆するばかりであった。

「神のみぞ知れかし、だな」と彼はつぶやきながらいそいそと商売に励んでいた。

そして果物箱がカラになると列車は去った。果物商は首を振りながら空になったケースをみていた。

汽車は別段急ぐ様子もなく走り続けた。しかしロシア人の乗車は禁じられていた。一度ロシア人が同乗しようと試みたことがあったが、警官が厳しく下車を命じた。「お前は降りろ」。「どうして駄目なんだ」。警官は言った。「この列車に乗っているのは皆聖人だ」。その男は降車台から押し出された。

レニングラードで電車に乗り変えて「移民の家」に着いた。ここで私達の中にいる小父さんの一人が大きな木の靴でレニングラードの女性の小さなエナメル靴を踏んづけた。「それは一体なんて履物なの」と彼女はいぶかし気に言った。彼はプリプリとして、「別に何のケガもなかったでしょう」と言っていた。

私達がレニングラードの駅で待っていると人々は好奇心で寄って来た。一人の老人は私の極近くまで来て低い声で話しかけた。「兄弟よ、一体何だね、どこへ行くのかね。」、「私はドイツに移住するドイツ人だよ。」と、私も小さな声で答えた。彼は悲しげな顔で下をみながらつぶやいた。「お前達はまだ出て行くことができるが、我々は居なければならない」。

私達はシャワーを浴び医師の診断を受けた後、汽船「フェリクス・デジェルシンスキー」に乗船し、ドイツへ向って出航した。私は興奮の余り眠ることができなくて、夜分デッキに休んでいると、静かに一人の少女が近づいて来た。少女はエプロンに何か入れていたようであった。少女はへりに行って水面を2つの木靴でパチャパチャ叩いていた。

11 月3日朝、太っちょの水先案内人が乗船して来た。私はゆっくりと近づき、思い切って尋ねた。「お聞きしますが、私達は今どこにいるのですか？」。彼は簡単にこう答えた「シュレスヴィヒ・ホルシュタインです」。夢ではない。私達は本当にドイツにいるのだ、祖国ドイツに。

ペーター・フリーゼン

1. 原生林の開拓者達

汽船は緩やかに進んで行った。この船はイタヤイ河を逆上ってブルーメノへ舵を取る。色とりどりに着かざった乗客達が乗っており、移り変わる景色に喜んでいた。ヤシの木々、トウモロコシやマンディオカの畑、居住者の家々、遠方には黒々とした森林や青い山脈がそびえ立つ。それはロシア・ドイツ人にとって新世界である。彼等はメノー派信者であると同時に、ウクライナ、ウラル、コーカサス、シベリアからの難民である。彼等はこれまで長い道のりを歩んで来たが、じきに目的地に至るのである。

人間の歴史は彷徨の歴史である。人間は休むことなくあちこちを徘徊する。メノー派の歴史もまたこの永遠の彷徨のひとつであることを示している。一民族がその途上にある。かつて故郷があり、その故郷を去らなければならなかった。しかしブラジル人は手を差しのべ彼等に居住権を与えた。

故郷の無い放浪人と、人々はメノー派信者を呼んだ。そうではないと断言することができようか。メノー派の人々が東アジアへと旅しなければならなかった事は、その歴史を物語る。一部の者は、1929 年モスクワを通る逃避の街道を、また他の者は氷りついたアムール河を越えて西側世界へ逃れた。

1930 年2月、メノー派の歴史の一つがブラジルに始る。未登頂の山といわれた「セラス」山脈に狭まれたクラウエル峡谷にハンザ植民会社の手により入植した者の数は 1,200 人である。彼らはロシアで全てを奪われた難民ばかりである。ブラジルは彼等にとって全てであり、自由、自分の土地が与えられ、独自の学校、そして聖書の教理を唱えても追放されることのない郷土を意味したのである。

ロシア大草原出身の入植者を乗せた汽船はイタヤイからブルーメノへ来た。馬車を駕してもう一丁先へ進むと、ハンザ・ハルモニア（イビラマ）およびニュー・ブレスロに着く。そこで、いざジャングルへ出発進行！と相成る。鉞や斧やピッケルを手に原生林に通じる小径を分け入る。間に合わせの寝泊りに小屋も必要である。そして各家族は自分の土地に引き移る。竹の節やヤシの葉を用いた粗末な小屋を最初の年は住家としなければならなかったが、雨風、害虫、寒さなどから身を守るに十分であった。しかし、何よりも喜しく有難い事は、自由であること

であった。もはや奴隷のように共産社会で生きる必要はない。

現在、なすべきことはウクライナやシベリアの平坦な草原の耕作に代り、原生林を伐採し開墾することである。斧の音が遠くに鳴り渡る。ストーンパインやシダ、スギの木が倒れ落ちる音が数キロメートル先でも響いた。毎日毎日、鉄のように固い幹や株を切り壊すため砕ける斧もあった。額から大汗を流しながら男も女も一生懸命働いた。婦人も大きな斧を振って切り開いたのである。日々の糧を得る為、全ての人々が労働しなければならず、自分の力の限界を超えた労働のためその後遺症に悩む母親の数は少くなかった。

樹冠の乾燥しているときは「roca」(ローサ)と称する焼き式の開墾を行った。燃え盛る焔は家々の屋根より高く上り、竹が何百丁もの機関銃のように火の海の中で破裂した。私は、今でも鼻をつく炎の臭いと共に、全天をすっぽり覆うかのように巨大な黒煙が見渡す限り立ち込め、風の流れに乗ってどんどん広がって行った様子を覚えている。

20 年間の努力、目的の為の強い意志、忍耐心のお陰で、クラウエル峡谷は耕作地に変わった。父親や母親は、耕地を獲得し、家族の生活をより良いものとする為に原生林を開墾した。苛酷な労働のため、その生命を何年も縮める結果になったこともあるのである。

(1) クラウエルの詩情

我々の祖先の運命は誠に波乱に満ちたものであった。自由な故郷を求めての遍歴が続いた。今度は原生林、山脈、クラウエル峡、「ロッサ」が新しい故郷である。黒焦げた樹幹、天につき出た樹冠の枝々、土中の根魂、イバラ、峡の間に流れるクラウエル河、何千もの泉水、滝や溜池にキラキラと水が輝く。

製材場が建ち、平板小屋の周囲にトウモロコシや豆畑が出来上った。道路工事や架橋工事が突貫作業で進められ、学校、病院など共有の施設の建設が始った。初期の頃の困窮さが移民相互の団結を強固にした。今日ではこの様な良さが無くなってきている事は確かである。ウィトマルスン、ヴァルトハイム、グナーデンタールの三植民地の他に、セラ山上のシュトルツ・プラトーにアウハーゲン植民地が建った。90 家族がここに移住したが土壌の悪さ、経済性の低さ、

険しい山並で輸送手段が少いなどの為に 30 年代中頃に解体せねばならなかった。大部分はクリチーバに転じ他はクラウエルへとやってきた。

一人一人がバラバラにやったのでは到底成し得ないことも全員の力を結集して達成することができる。数年間で製材場 3 ケ所、製油所一ケ所ができ、実用材や高級木材を製造し、また個人的提案が始めた家具工場も 2 軒建った。マンジョカが加工される澱粉工場、病院、重要消費材の売買、入植地の電化すべてが組合組織で進められ、皆の繁栄に寄与し、クラウエル移住地の発展を一定程度可能にし、促進した。ブラジルが必要とする経済組織および協同組合組織が 20 年間の開拓の労苦により築かれた。

日々の糧を得る心配が次第になくなってくると、移民達は今度は自分達の入植地に広がる森林を切り開き、広大な耕作地として開墾を始め、そこにトウモロコシやマンディオカの栽培に精進した。自分達のトウモロコシやマンディオカを持つようになると、食物の配給制も廃止された。また、誰も不足が無いようなある程度充分な現金が支給されていた。

(2) 豊かな猟場

クラウエル峡谷は東西 18 Km に及び、その両側に高さ 2,000 m のセラ山の絶壁がそびえ立つ。忘れる事のできぬのは「丸太の逆おとし」である。長さ 4 ～ 5 m、直径 1 m もある大きな樹幹が谷底に向かって轟音と共に滑り落ちて行くのである。この原木を近くの道まで雄牛が引いて行った。当時はのんびりとしたものである。牧童はけたたましく牛を追い立てて軛に繋ぎ荷を引かせるのである。少年達は大層これに憧れたものだ。私は小さい頃、大きくなったらこんな牧童になりたいと夢みた。

谷間の森には沢山の野獣が生息している。ここには小型の獣が多くみられる。サルが木の枝にぶら下がって飛び回り、イノシシ、野ウサギ、ハリネズミ、鹿などが大量に跳び走っている。トウモロコシの収獲の半分も喰われてしまったことも屢々であった。オウムが何千羽と居て我々の作物を好物にしていた。

獲物を求めて多勢の猟師達がブルーメノ、ハンザ・ハモニア、ニュー・ブレスロなどからこのクラウエル谷に入った。猟は大体 5 ～ 6 人一組となり、猟犬

を使って行う。獣を射止めるのは比較的容易で、ほとんど常に大量の獲物をかかえて帰って行った。ここにはプーマが生息して恐れられていた。ねらい射ちしたタイガーが猟師に襲いかかり腕を喰い取ったこともある。またアンタと呼ばれるバクも棲み、イビラマの猟師フーゴ・ヴォークトは仲間と一緒に全部で150頭のバクを獲えたと話していた。

(3) セラ山最後のバク

（ハインリッヒ・ハルダの話による）

ある夏のこと、私は原生林で木材を雄牛に引かせて製材場へ運搬するところだった。

突然、連れていた犬が何か獣を追い駆け出した。私は多分セラ山の方から狩で追われて谷間に降りてきた鹿だろうと思って、フリント銃を持って犬の跡を追った。私は猟用ナイフを携行していなかったので、竹やツルの生い茂る中を格闘しながら進んで行くと、目の前に急に岩壁が現れ、ガケのコブに大きなアンタ（バク）が立っていた。重さ200Kgはあると思えた。丁度大木が横倒しになり橋の代りになっていたのだ。そこは上からも下からも近よれない絶好の逃げ場であった。私は銃を構えて一発射撃した。銃声は谷間中にこだました。しかしアンタの左目を射抜いたにすぎなかった。私は大きな石を投げつけて殺そうと考えた。しかし獣皮は厚く固い。私はどうしていいか途方に暮れた。

そこで助けを求める為、大声で谷底へ向かって叫んだ。叫び声は岩壁にぶつかって幾重にも反響した。然し誰も助けに来ない。私は喉が張り裂ける程大声で叫んだ。ようやく昼頃になってヤコブ・テウスが登って来た。ヤコブ・レギャとアグネス・ヤンセンもやって来た。テウスから渡された手斧を持って私は敢然と切りかかった。アンタは頭に傷を負っただけで逃げ出し谷底へ跳び降りて行った。

ヤコブ・レギャは鉈刀を持っていたが、アンタが猛進して来たので後退せざるを得なかった。しかしついに死闘も終りである。アンタのコメカミを狙った一発で闘いは幕を降ろした。クラウエル最後のアンタは意識を失いヨロヨロと

谷底へ落ちて行った。

(4) 原生林の農民 「詩の要訳である」

原生林を開拓する農民の労働・苦労は誠に苛酷なものである。獣の様な粗末な暮らしで始まった生活も何ケ月かの間で豊かな収獲を得て働く喜びが沸き上る。困窮の中で生まれた若き移民の子は明るく元気に自分の体に流れる赤き血潮の燃えるのを感じる。このつらい荒涼たる自然との闘いが必ず終わることを知っているから。（作者不明）

(5) 協議会の設立

ハインリッヒ・レーヴェはメノー派宗教年鑑（1961年、74頁）で次の様に述べている。「移民グループの為ドイツ帝国政府から派遣されたDr.ランゲの指導の下に協議会が設置され、各家庭は会費として一定の現金を納入した。協議会の取り決めに従い、製材所、製粉所、大きな学校（礼拝等宗教的目的も兼ねる）が建ち、また購売店も設けられた。脱脂牛乳場にはバター工場が付設され、後には澱粉工場も建ち、私的活動としてレンガ製造所も生まれた。これらは全て最初に入植したウィトマルスン村とヴァルトハイム村の間に並んで建設され、移民は相応の値段でミルク、マンジョカ、トウモロコシ等生産物を売りさばくことができた。原木や農産品を売って得た利益で馬や自動車や乳牛を購入した。また日々の必需品は購売店で賄う事ができた。寄り合いは純益金を小学校2校の維持に充当し、なお上級学校とそれに見合う教師の維持にあたることができたのである。教師は幸いにも仲間の間から出すことができた。

最初のアシの小屋も瓦屋根の大きな木造建物に変わった。他の人が移住者が入植して4～5年後にやってきてこの移住地の組合の業績と移住者の立派な成果を目にしたら、移民の働きに驚嘆の声をあげるだろう。そしてまた我も移住地の存立に自信を持った。

生活条件や原始林開墾の厳しさの為、もっと有利な経済環境が求められた。ロシアの豊穣な黒海沿岸草原と比べて原始林の差は余りに大きすぎた。しかしながらロシアで国粋化政策の波は我々の学校や良き教師までも奪い去り、我々

は不安と焦燥にかられた。

1948 年内部の緊張から 70 世帯がリオ・グランデ・ド・スールにあるバージェの小麦地帯に移動した。そこで 3,000 ha の土地を買入れ、ノーヴァ移住地を建設した。この時にクラウエルの移民は団結とその生存基盤が著るしく危ぶまれたのである。

「これまでの間、我々が移住地内で非メノー派に対し、徐々に浸透し、経済的文化的に独占状態となったことが、外部の利害関係者の格好の攻撃の的となり、これが我が入植地の分離をもはや避けられぬものとした。」（植民地指導者Ｐ．パウルス一世がＪ．Ｊ．ティーセンにあてた書物より）

メノー派信者は数百年に渡り、協同的生活組織において独自の献金制度を制定してきた。文化的・経済的に独立性を維持するという原則に固執したため、非メノー派の人々とのあいだに癒しがたい緊張感を生んだ。

組合事業、学校、病院、道路等々を建設し、維持する為、各家庭は共同負担しなければならない。社会政策は国家の仕事だが、これらも我が移住地で独自に実施しなければならなかった。なぜならば健全な移住地建設のためのインフラストラクチュアが不足していたからであった。非メノー派の人々はこの様な情勢を理解せず、また負担を分担する意志に欠けており、彼等は逆に押し寄せる強敵会社の利となる様な結果を招いたのであった。

「ウィトマルスン移住地は団結して 20 年間に及ぶ苛酷な開拓により自らの生活基盤を勝ち取り、献身的かつ忠実にメノー派の伝統文化を守りつづけた。それはつつましやかなものであっても、彼等の独自性を守り通したのである。」

上述の引用文からも分る様に、なぜクラウエル移住地が解体の道を歩まざるを得なかったのか。また問題の解決を性急に求めたのか。何はさておいても彼等は自主性・独立性を守る事が全てであったのは驚くにはあたらない。

村が解体した後、その穴を埋める為、北アメリカメノー派協会に 1 万ドルの借款を求めた事もある。もっともしばらくして、これでは問題が解決しない。この理由でもっと広い土地を手に入れようという新しい移住計画の実行に踏み切る事が最良の策であった。

(6) クラウエルのウィトマルスンと新しいウィトマルスンの想い出

「詩の要訳」

緑の原生林の中に建つ小さなみすぼらしい家だが、家の中は愛と信頼に満ちている。

裸足で学校に通い、雨が降ろうと風が吹こうと私達は早朝定刻どおりに登校した。

黒や茶色のサソリが道端に沢山おり、悪賢しこい眼付きで子供達を睨みつける。

教師は唯一人フンク先生が5クラスを教え、とても厳格で、行儀の悪い生徒は罰される。

学校が終わると我家へ一目散。お昼の簡単な食事を終えるともう出かけねばならない。

トウモロコシやサツマイモの栽培を炎暑下、蚊やスズメバチが人間や馬を悩ます。

夕方、疲れてやっと家に帰ると、家畜の世話が待っている。それから晩餐である。

夜、あたりは静まりかえる。聞こえるのはクラウエル河やコオロギやフクロウの声。

獲物を求めてタイガーでも茂みに隠れているのだろうか。

遠く夜空に南十字星が輝き、静かな平和の象徴のようである。

子供の頃の話はもうとっくの昔のことになるが次の世代の為、書きとめねばならない。

我々は子供達に最初の苦しい生活、原生林や野獣との闘いを教えてやらねばならない。

父母の汗と涙に感謝し、また神に感謝の祈りを奉げる事を教えてくれた事も大切である。

今まで住んだ部落を捨て、新たなる故郷を求めて大草原を旅する。

人工牧場で乳牛を飼いミルクを製造し、穀物を収獲し、村の中心に学校が建つ。

我々は自由を与えた神、国家に感謝する。我々を正しく導き労働を祝福された神に感謝。

地上の故郷よりもっと大切なのは天上の故郷を求めて生きることである。

エリザベート・テウス

2．パラナへの移動

(1) 新しい居住地か？

新しい居住地に対する欲求は日毎つのった。1947 年、MCC の事務局長オリー・ミュラーがブラジルを訪問し、後進者のための余分の土地を求めた。MCC はロシアの難民をブラジルに導入し入植させる希望であったが、ブラジル政府の国防問題に災いして御破算になった。

当時選ばれた「ブラジル慈善委員会」が土地捜しに対拠していたが、1948 年牧畜にも適する様な良い土地は見つからなかった。非常に期待されたのはロシア人難民の導入のためと同時に我々の移住地の安定化に資する新移住地であった。さらに移住地の耕地の不足があった。土地を失った者が年々市内に住むようにならない為にも新しい移住地に「コロニア」を建設する事が当面の課題となって現れてきた。

ブラジルにおけるメノー派移住地のかかえる問題点は次の 4 点である。

「1. 機械耕作が不可能な土地柄なので大量生産ができない。世帯が増加した時に当てる土地が不足している。移住地は外部の要素により次第に弱体化している。

2. クリチーバ近辺に移住した事はたしかに幾らかの軽減になったが、他方では、個々のそして全体の家庭の崩壊と没落の危険を増大させた。

3. 従ってブラジルにおけるメノー派移民問題の真の解決は、独立した機械化農業の出来る十分な土地の中で自分達の独立性を守る事になるのである。

4 この様な移住地の実現にはMCC の借款の援助が必要である。クラウエルおよびクリチーバは新しい移民を入れる義務を負い、MCC は援民グループを入植させるものとする。」（デビッド・ニッケルの書簡 1948 年 6 月）

(2) 土地を求めて

1949 年、クラウエル移住地は全く新しい状況が生じバージェに移った。新しい移住の思想が強力な力となった。移住地の存続か解消かが真剣な議論の対象となった。

1949 年ペーター・パウルス一世およびハインリッヒ・ベルクがポルトアレグレに派遣されリオ・グランデ当局に対し植民地化を目的とする耕地の収用を働きかけたが、がっかりしたことには当局権威筋の話では斯る方法により土地を収得する望みは薄いというものであった。

1950 年 1 月、再度リオ・グランデ・ド・スールへ代表団を送り小麦の栽培に適する移住地を求めている事を訴えた。その結果農園主から個人的に土地を購入できた。

1949 年 8 月 20、慈善委員会（Comite Caritativo）は州政府長官 Dr. ガストン・エングラートに書状を送り、142 世帯 768 人が小麦耕作者としてリオ・グランデ・ド・スールのバージェ近郊に居住し、移住地建設を行う意図である旨申請したが、土地の価格が余りに高価すぎた為、この計画は挫折した。リオ・グランデ・ド・スールに定着するためのすべての試みに失敗した後、1950 年 5 月 17 日の教会関係自治会幹部の会議では新たにパラナ地方の西部・北部に土地を求める事で意見が一致した。

西パラナ地方に果たして移住地建設の可能性が有るか調査して来たハインリッヒ・カスドルフと移住地指導者の 1950 年 6 月 12 日の幹部会議の席上での報告は次の様に述べている。「耕作に適するのかの観点から言えば、原野の土壌は完全に不向きである。然し林地の土質は反対に肥沃である。1 ha 当り 28 袋の小麦が穫れよう。ムラサキウマゴヤシの栽培に特に適しており、70 cm 高さのものを年 9 回刈取る事ができる。しかし、原生林がおい茂っている。実用材として松林が広く成育し、ベニヤ板に加工して輸出される。またヒマラヤスギ、セイヨウスギ等の実用材もアルゼンチンに輸出される」（H・カスドルフ及び P. パウルス共同報告、『移住地の記録』48 頁。）要約すると移住問題は次の 3 つの可能性を示している。

「1. リオ・グランデへの移住については、将来性の保証は無く、発展可能性は小さい。長期間の莫大な負債を負うことになる。

2. パラナへの移住は、リオ・グランデと比較して物理的な労力を要求されるが負債の額は最少限に押さえられる。急速な経済発展および将来に備えての土地の確保が保証される。

3. 移住地の安定化については、各個人はできる限り自己の利欲を捨て全体の合意を追求しなければもはや解決の途はない」（前掲書 50 頁）

3．カンセラ農場の買収

1951年1月20日クリチーバでデビット・クープ、ハインリッヒ・ベルク、アブラム・エンス、ヤーコブ・ウィーベ及びP．パウルス一世が出席して会議が開かれ、ウィトマルスンおよびクリチーバの移住民は合同してクリチーバ郊外の牧草地に新しい植民地を建設する決議がなされた。

既に1951年1月30日にはハインリッヒ・ベルクがファゼンダの売却新聞広告をウィトマルスンへ持ち帰り、パラナのカンポス・ゲライ（クリチーバの西方70Km）に9,266ヘクタールで400万クルゼーロ又は135,000ドルの土地を見つけた。早速1951年2月19日、トラックで37人がパラナの実情を調査に向った。クリチーバの何人かも視察にでかけた。当時の指導者P．パウルス一世は1951年2月24日付でJ．J．ティーセンに宛て、土地の様子を次の様に報告している。

「この農園は土地面積9,266ヘクタール、クリチーバとポンタ・グロッサを結ぶ街道沿いに位置しており、クリチーバまで68Km、幹線道路から6Km入った所にある。最も近い鉄道駅ではパルメイラまで18Km、ポルト・アマゾネスまで24Kmある。クリチーバとポンタ・グロッサ間の定期バスは日に2便出ている。このファゼンダは専ら酪農用に造られ、周囲は完全に柵が巡らされ且つ放牧場は11区分してある。ファゼンダのほぼ中央には建物がみられる。大きな近代的設備の住居一軒、中型の住居4軒、大きな家畜小屋、農作業場等々。全部で21棟広大な野菜畑、果樹園、トウモロコシ、シロツメクサ、サトウキビの栽培場、さらに養鶏設備も完備している。それに加えて独自の水力発電を通じて各家庭に電気が送られ給水設備も備っている。敷地全体の周囲約100Kmに鉄線が五条に張ってありモデル農場の体裁をとっている。建物と柵の価値は100万クルゼーロと見積もられる。

地勢は起伏があるが、平坦地はまとまった移住地施設の構築に適する。地質は砂土で所々岩層が出ている。ここは純粋なステップ地帯で植物が良く成育し、よく肥えた草のはえた上質土である。ファゼンダが飼育する家畜の種類は牛、馬、羊などである。専門家の鑑定に拠ると、適当な肥料を与えれば農い収穫を生むだ

ろうという事であり、クリチーバの土壌より好ましいとの事だった。森林の状態は小規模な為にたきぎ用にまかなえるか疑問である。水量は充分である。各放牧地は充分な川が流れている。大型発電を行う為に適する大きな河も存在する。ファゼンダの高度はクリチーバとほぼ同じであるので気候的にもほとんど変化はない。

全体の印象は計画をたてて新しい移住地を建設するのにカンセラ農場が適当であろうというものであった。

十分な肥料を与えられれば農民は満足のいく収得をあげられることがさらに確認された。

植え付けられるのはマンジョカ、トウモロコシ、小麦、ジャガイモ等である。」

（移住地指導者P．パウルスからJ．J．ティーセンにあてた書簡）

視察団はオランダ人の移住地カランベイを訪問し、彼等の主たる収入源は乳業であることを確かめた。この地の緑草や新鮮な水により家畜の飼育は保証されている。協同組合により農民の全生産物と乳製品はいい値段で売れると説明された。クリチーバの市場への輸送は大変楽だという事である。

(1) レースは開始された

カンセラ農場を買うべきだとはみんなにとって明らかである。カンセラ農場を即時に支払うだけの金財を所有していなかった為、方々に金策を試みた。我々は万場一致でUSA とカナダのメノー派総務会議に8万ドルの信用貸を請求した。この問題に関しては決定が急がれた。農場側は熟考期限を1951年3月20日と設定した。それまでに決定が下されねばならない。

事は急を要し移住地指導者は、複雑な問題の内容を詳細に叙述した報告書を送付し、明確な回答が導き出された。

教会長老のデビッド・クークもまた似たような内容の手紙をJ．J．ティーセンにあてて出しているが、カンセラ農場の購入への援助を求めている。ウィトマルスンとクリチーバ双方の移住地にとり新しい移住の問題を解決することが緊要であることが再び強調された。

「クリチーバから左程遠くない郊外に、都市の影響力をのがれて移民に充分で広大な土地を購入し、ウィルトマルス移住地とそこでの組織およびクリチー

バ周辺のメノー派信者のために独自の学校、病院を持つ独立移住地を建設し、協同組合に基づいた混合農業を営み、主として酪農と質素な農業を行う為…」（前掲書 19 頁）

「協同組合とは移住地の健全な発展が保証される次の様な機関である。

1. 我がウィトマルスンの解体の帰結たる事態の今後の展開を防止する。
2. 都会の悪影響が我が移住地社会を汚染せぬよう守る。何故なら、牛乳運搬の為毎日町中を往来することを強いられているから。
3 都市において全生産品を有利な価格で取り引きするよう販路の開拓に努める。（前掲号 21 頁）」

全体会議を動かし、重要な借款を与えるため長老のＪ．Ｊ．ティーセンがとりしきった。これはデビット・クークとＰ．パウルスにあてた手紙にあらわれていた。「私は望ましい借り入れが敢行されることを信じる。全体会議は我々の兄弟を見捨てないであろう。速やかな措置が迫られている。期限が 20 日にすぎてしまうからである。」

ファゼンダの所有主、ロベルト・グラセル氏に対し売買条件を話し合うため、ハインリッヒ・ベルク、アブラム・エンス、Ｊ．ウィーベ、Ｐ．パウルスから成る委員会を設けた。

ファゼンダ側は既に初めの要求価格 400 万クルゼーロから 350 万クルゼーロに減額しており、頭金として 250 万クルゼーロ、残り 100 万クルゼーロを 6％の元利計算で 1 年以内に返済するよう求めて来た。

クラウエル解体をめぐる移民間の激しい意見の対立の模様を移住地の会議記録の抜き書きで示そう。

「現状を鑑みるにこのまま狭い限られた移住地内でやって行くことは期待できない。移住地全体の移動と新しい移住地の建設には賛同が得られた。新しい移住地を求めるに当っては、経済的メリットより、共同体の独立性の維持を最重要事項とすることが強調された。

他の移住計画に対しては全部の賛意が全く得られなかったので、――我々の財政的な可能性は除外して――パラナ州のこのファゼンダをクリチーバのメノー派共同体とともに移住地を建設することを計画することが会議で決議された。

この決定は我々が移住地に依存しているという個々の現状認識によりなされた。」（前掲書20 頁）

更に次のように述べている。

「I　本計画は、ウィトマルスンとクリチーバの共同移住を目的とする唯一かつ最善の解決策であり、いかなる場合にも共同社会の存続により利益が実現されねばならない。

II　我々の植民地が残るためにはファゼンダの対価は然るべきものである。土地の価格は安い。ウィトマルスンの約半分、またリオ・グランデ・ド・スールの21 %に過ぎない。

III　頭金250万クルゼーロを支払うために現金を作ることは、ほとんど見込みがないように思われる。我がコロニアに蓄積された資本の流動化を促進しない限りは、これらを考慮して全体会議は約8万ドルの借入れを求めることを全会一致で決定した。

然し借款金高は6万ドルとして残りは自己調達で切り抜ける事を期待した」（前掲21 頁）

3月27 日の総会において全土地購入者に対し、各々1ケ月以内に自分の移住地内の土地を買却せずに土地の購入の為どのくらいの現金を支払うことができるか明細を提出させたところ合計101,000 クルゼーロであった。

次にどの程度の土地を購入する意図であるのかを調べた所60 世帯で合計4,000 ha であった。1家族当り100ヘクタールまたは50 ヘクタールしか売られないと共同体の決議が出された。同じ権利が独身者にも及んだ。総会は全土地購入者に対し1952 年1月1日までに全農地を100 ha 当り1万クルゼーロで買い取るよう要求した。

これは買い値の丁度半分である。

(2) 救いの手

3月10 日Dr. H. A.ファーストからの電報で総務会議は既に振り替えた1万ドルに加えて、1万ドルを短期借款する約束をしたとの知らせが入った。そこで再びクラウエルにおけるのっぴきならぬ窮状を訴える為の詳しい報告文を

送った。メノー派が何如に自己の犠牲を献げる覚悟であるか、全家族一致して新しい移住地建設の為耕作されている農場、共同体の組織全てを投げうち、自己の主義にのっとって自分達の共同社会を築き上げることが、メノー派が歴史に足跡を残し、国民共同体に結びついていたかを示す証しである事を詳細に訴えたのである。

「現在、我々はメノー派共同体の存在の成否に係る問題に直面している」。我々は何度もこう認めざるを得ないのである。

総務会議にとって6万ドルの借款は大きな賭であった。何如なら、デビッド・ニッケル牧師、アブラム・デュック牧師およびP．バウルスの署名した借款証には何ら法的保証の文言が盛られていない好意的な信用であり、相互の信頼と信用に基づくものであったからである。Dr．ヘンリー・A．ファーストは当時の様子をこう語っている。

「4月19日ニュートンにおいて代議員集会が開かれ、借款金額をどの様にして集めるかが話し合われた。これ程の大金の徴募は我が国内においても決して容易とはいえない。我々はこれまで南米の同胞達に何度か失望した経験が有り、今回とてやはり善意で貸した金の返済を危ぶむ声が全く無かったわけではない。外国の同胞達に対する借款は全面的に彼等の忠実さに頼る行為であるから是非とも我々の期待を裏切る事のないように頼む。」（1951年4月17日付ファースト氏の移住地指導者宛の書簡1951年4月17日）

この高額な借金を新たに背負っての移住地建設は移住家族にとっても大きな冒険であり、且つUSA及びカナダにとってもこれは我々の忠実さを盲目的に信頼しての非合法的借款であるという危険なものであった。Dr．J．J．ティーセンは次の様な疑念の手紙を送っている。「こんなに大金を必要としない手段は他にないのか。我々は多くの義務や請求をかかえておりとても短期間で7万ドルもの募金を行う事は困難である。」（1951年4月4日）

今日25年を振り返るとき、我々はウィトマルスンの人々の開拓魂の素晴らしさに敬服せずにいられない。カンスラ農園の購入に踏み切った決断力の強さ、そこに秩序ある共同体部落を築き上げた献身的努力、外の世界に同化せずメノー派独自の社会に徹する信念の固さ！

我々は北米メノー派同胞に心から感謝を奉げ、特にJ.J.ティーセンにはブラジルの我々の仲間を窮状から救い出す為手を差し伸べ八方手を尽くして戴いた。失なわれた故郷を後に、新しい故郷を創造するために。

(3) 忘れるなかれ。

我がパラナ州ウィトマルスンの前史、すなわちその存否は正確には1951年1月31日に始り6月20日に集約されていた。我々は我々の信念と希望の為献身した人々の苦役の足跡をここに示しその功績を代々忘れることなく後世に特に今日の若者世代に語りついでいくことが必要と考える。

この半年弱の間に移住地指導者と総務会議との間には38通もの書簡と報告が交わされている。ウィトマルスンの生成は偶然ではなく、我々はそこに神の導きの歴史を見るのである。我々の闘い、苦渋、躊躇、期待、祈り、骨折りと労苦はむだではなかった。すべてに神は応えてくれた。夢は現実となった。それがウィトマルスンである。

1951年4月28日、命運を決する時が来た。Dr.H.A.ファーストより電信でファゼンダ購入の為6万ドルが承認されたと伝えられた瞬間、レースは決定した。これによりロベルト・グラセルは、頭金の支払い条件を好意で3万ドルに減額した。これはアメリカからの融資で充当した。

売買契約書の作成においては、ファゼンダ側が細目条項を厳格なものにして成る可く束縛を多くしようと意図した為非常に手こずった。しかしもう土地も農園も共同で入植するための我々のものである事は確かだ。決して容易な仕事ではなかった。我々は険しい開拓期間を乗り切り切り抜ける為全員が一個の人間として意志を通じ合い全力で働く熱意に沸いていた。「意志のある所、必ず道は開ける」、「天は自ら立つ者に成功の鍵を与える」J.J.ティーセンは売買契約書にこの様に記している。

サイは投げられた。6月7日、売買契約書にロベルト及びイヴエテ・グラセル、並びにペーター・パウルス及びペーター・ニッケルが署名を行った。この瞬間パラナ州ウィトマルスンの誕生の時が告げられた。取引金額は2,971,780クルゼーロであった。この金高より「インベルナーダ」(放牧場)、2ケ所リン

カーン・ド・サルトとスマカを、隣接するファゼンダ・クリスティアーノ・ユストウスに転売してさらに減額する事ができた。

4. クラウエルの解体

カンスラ買収に成功した後、次に待っていた問題は旧移住地の売却であった。SAW世襲財産を始め病院・学校建物すべてを譲渡しなければならない。パラナ州の土地購入の可能性は弱少な農民にも与えられるだろう。遅れは許されない。

「一人は万人の為、万人は一人の為」の原則通り、一人残らずパラナへ移転できるように協同組合は徹底した援助を入植者に授けた。

イタリア入植委員会はウィトマルスン全体をそっくり解散するような態度を示したこともある。リオのドイツ大使館もブラジル向けドイツ人移民の今後の増加を見越して、移住地購入と協同組合組織に関心を示したが、ボン政府の関心は薄く実現しなかった。

S. A. ウィトマルスン（SAW）が処分した項目：商屋3軒、倉庫4棟、納屋2戸、自動車用倉庫8.5 haの土地、澱粉工場、分場付きの酪農場、食肉工場、製粉工場、電気照明設備、病院、組合ホール等4軒、水力発電設備、製材場2軒、電話設備等々。

大抵の移住者は開拓地を個人でドイツ人又はイタリア人移住者に売渡しを行った。売値は元の買値より遙かに廉価であった。この結果、個人及び共同体全体で約50％の損失を被る事になった。

ウィトマルスンの事業すなわち澱粉工場、製材工場はツェルナ家に、またグナーデンタール（神の恵みの渓谷の意）は、パウル・レフラーに売却された。ヴァルトハイムの教会はグナーデンタールの学校とともに新教のルター派の教会が購入した。ウィトマルスンの学校と、役場の働きをしたヴァルトハイムの学校はこわされて、パラナ州に運ばれた。他方新ヴァルトハイムの学校校舎は当局に購入された。

このような村落の解体は多大の損失をこうむった。なぜならパラナ州の新しい土地が購入され、それに対し支払いがなされねばならなかったからである。自分の土地で耕作することをみなが望むのである。書かれた手紙よりクラウェルの債権者が支払いがなされるのを首を長くして待ったことは明らかである。

施設を価格より大幅に下回って売却しなければならず、そのため分割払いの遅

滞をきたしたことで特にアノニマ・ウィトマルスン会社は苦境にたたされた。クラウエルの解体は私有地および共有地の実際の価格の約50%の損失をこうむった。

6月8日ペーター・ニッケル、ペーター・パウルスとアブラム・エンスとともにロベルト・グラセルは、過去のファゼンダの家財の勘定を清算した。我々の現在の病院の家具一式、垣根の材料、4台の馬車および他の様々な付属備品といったものがそれに該当する。

大きな車軸と延びたアームの旧型の自動車が当初はパラナ州内から海沿いまで何百キロもの距離を交通手段として人々を運んだが、後には、長年古い実業学校のそばで子供たちの遊び道具となっていた。

5. パラナのウィトマルスン

(1) カンスラの歴史

「カンポス・ゲライス」は長い間、サンパウロの牧畜に使われていた地方である。前世紀の中頃までインディオが遊牧し、1768年カストロにおけるインディオによる白人襲撃と殺りくは有名である。繰り返しインディオによるファゼンダ襲撃がなされた。それゆえインビツーバの司令官は「火器弾薬で野蛮人をけちらせ」と命令した。1814年以降、毎年インディオ狩りが挙行された。「野蛮なインディオ」は殺され、負傷して捕えられた者は奴隷として公然と競売で売買された。前世紀中頃までは牧童達は腰にピストルを差して常に敵の来襲に備えていたのである。

1857年当時のテネンテ・ビタンガの記録に依るとファゼンダ・ド・アレグレーテでは牛や馬が飼育され大層盛んであったらしい。ファゼンダ・カンスラは一級の馬の生産地であったと記されている。(「カンポ・ゲライス」36頁)

昔はクリチーバ、パルメイラ、ポンタ・グロッサは、ウィトマルスンとともにほとんど入植不可能と思われていた。

しかしファゼンダ・カンスラの名前はでてきます。なぜならあらゆる意味が説明されます。「カンスラ」とは門戸、入口という意味です。このあたりはカンポス・ゲライスとパラナ州に広がる約8,000ヘクタールのよく整備されたしかもりっぱに営まれた大土地として知られている。

代議士ロベルト・グラセルは1921年から43年にかけて色々と土地を買い集めた。現在、第3村にその遺跡を見ることができる。ここに昔、ドナ・カンスラという名の女性大地主が住んでおり、ファゼンダは彼女の名をとって名付けられたものである。当時、ファゼンダ・カンスラは10ケ所の放牧場(インヴェルナーダ)に分割されて売りに出されていた。即ちカンスラ、スマカ、リンカン・ド・サルト、クラール・ノーヴォ・デ・バイショ、カシャンブ、ソノ、デスバランカード、アレグレーテ、クピム、ポトレイロである。

ファゼンダの中心である家敷、労働者用住居、家畜小屋、養鶏場、納屋はカンスラ州とソノ川が流れ込む付近に建てられている。

(2) ドナ・リタ・ダ・カンスラ

このファゼンダは、由緒ある家系の名前の中で特に重要である女性にちなんで名付けられた。

1870年のメモに依ると、ドナ・リタについて以下の記載がなされている。当時96歳の老令にも拘らず家事や眼鏡なしで縫い物をしたという。彼女は35Kmのの道程を馬車で毎日曜パルメイラまでミサに出席していた。

その道すがら、彼女は近くに住む親類やファゼンダを訪ねた。ドナ・リタは大層子宝に恵れており、アブラハムの妻サラのように子宝がないことで嘆く必要はなかった。神の恩恵は留る所をしらないようである。彼女は13人の子供を産み、長寿の御蔭で、彼女の生存中に授った子孫の数は次の様になる。

孫	87 人
曽孫	233 人
曽々孫	25 人

自分の子供を合わせると何と 358 人の大世帯であった。まさに敵の軍勢が攻めてきても持ちこれえられるだろう。彼女の子孫の多くはパラナ南西の幾多の街の建設に貢献したという。（ドナ・イヴェテ・グラセルの記録文書から）

ドナ・リタ・ダ・カンスラの農園主一族の子孫がパルメイラにも住んでいる。もう少しこのドナ・リタの人柄を語るため歴史を語ろう。

ドナ・リタは労苦を恐れはしなかった。半日かけて馬車に乗りでこぼこした田舎道をパルメイラまで礼拝に通ったという。彼女は信仰の為とよく克己を貫いた敬虔な婦人である。「カンスラ」の名は、ウィトマルスンの乳製品の商標として永遠にこの世にとどまるであろう。民衆の間ではウィトマルスンはいまもカンスラと呼ばれている。

ウィトマルスンはカンスラの歴史を受け継ぎ、これを全く違ったものとして発展させた。これまで屠殺用の牛が見られた放牧地や丘の上に、今日では牧草地を改造した開拓地の一つのシンボルになっているトラクターやコンバインが縦横に活躍する一大穀倉地帯に変身した。

(3) 新ウィトマルスン計画

6月半ば、D. ニッケルを団長とする9人の企画委員団がカンスラに派遣され、移住地の村落形態や個々の農地の評価や測量が開始された。この作業は、沼や丘陵が村落設計を妨げ予定通り進行せず難行した。

デビッド・ニッケルの1951年6月17日付メモには次の様にある。

「1　早急に管理者として2家族を呼び寄せる必要有り。

2　管理者の為、馬を買うべし。

3　クラウェルの移住者の同意を得て、150頭の羊と鶏を購入する事に意見が一致。

4　各世帯当り最低1ヘクタールの土地を耕作し、ジャガイモ等を栽培する。アブラ・ムエンスは刈入れまで肥料をクレジットで手に入れることをもくろんでいる。個々人の意志にゆだねず全体として耕作されねばならない。というのもトラクターは耕作地全体を耕すのに使われるのであるから。」

クリチーバ出身のアブラム・エンスは、また、農林当局に対し、新しい移住地の為にトラクターを融通する様に働きかけた。8月6日、2台のトラクターが始動した。第1村の道路に沿って開拓が始められた。エンスは210袋の種用のジャガイモと人工肥料を調達した。土壌は大変砂を多く含み、期待した様な収穫が得られるか懸念された。

1951年6月21日新ウィトマルスンへの最初の入植者、ゲルハルト・ハインリッヒ家族、次いでハインリッヒ・カスドルフとジョン・アッセブルクが入植した。

最初に呼ばれてきた者が、道を作り、農園を管理し、最初の開拓者の仕事に従事した。彼らはまた当時カンスラにたまたま留まっていた労働者の家族とも良好な関係を維持した。

当時の模様を記す手紙（1951年8月8日付）が移住地指導者からDr. J. W. フレッツに送られている。

「ウィトマルスンの20年間の歴史における最大の危機も峠を越し、我々移住地社会の前途にもようやく明るい光がさし始めたようである。我々はこの不安な状態がカタストロフィー的解体に陥らずに済み一体性と我々の教義を守るこ

とができて、貴会のご理解と寛大なご助力と皆様のご尽力に感謝致します。私は全ウィトマルスンの人間に代って貴殿に感謝の意を表明したい。同時に、我々は貴総務会議の厚意による借款を遅滞なく返還する事をお約束する。従来のウィトマルスン移住地同様新しい移住地もまた全メノー派教会の維持と発展のために奉仕するであろう。

先月末、我々はクリチィーバにあるパラナ州政府当局に請願書を提出し、我がジードルング計画に大きな関心と大方の賛意を得たので、転住に際しては容易になるだろうと期待している。また新移住地建設の為、兵役義務にある若者もその服務を猶予してほしいという希望もあります。

現在、完成した家を手に入れるために人々は建材作りに追われている。全ては我々のコロニーの売却状態に依存しています。この村がまとまって清算する努力がうまくいけば、すぐに全員で移転できるのだが・・・・・。」

(4) パルメイラ―土地と人

パルメイラは美しい響きをもつ地名である。パルメイラはここから30Km 離れた郡庁所在地の名でもある。パルメイラの紋章にはヤシの木が表されその下で農民が種蒔をしている図が描かれている。住民の大部分はポーランド及びイタリア系子孫で占められる。郡当局はウィトマルスンの植民地計画を大変に歓迎し、出来る限り援助すると約束した。パラナの広い原野に立つウィトマルスンは植民地および民族集団としていわば一つの島を形成している。最も近い町でも 30 ～ 40 Km離れている。 そのカンポ・ラルゴとポンタ・グロッサは約100 年前までは牧童達の休憩場であった。

ウィトマルスンの隣接移住地はクェロ・クェロといい、1880年にブラジルへ入植したヴォルガ河畔のドイツ人である。彼等は小さな農場を築いて生活しており、彼らのうちの多くの者がウィトマルスンで協同組合の仕事や農作業に従事して生活している。土着の農園主、ヴォルガのドイツ人、イタリア人、ポーランド人そして険しい山岳と森林地帯出身のカボクロ（現住民）が我々の隣人である。

地理的に見ればウィトマルスンは 2 本の重要なアスファルト舗装道路の分岐

点にある。国道263号線はコーヒーの道と称われ北パラナ地方の大生産地帯を結ぶ幹線道路である。国道277号線はパラナグアとフォス・ド・イグアスをつなぐ東西の軸である。ウィトマルスンは標高1,200メートル、温順な気候と高地の空気および日光に恵まれた土地である。

(5) ウィトマルスンの名の由来

何故ウィトマルスンという名が新移住地に付けられか、その由来を当時の移住指導者に尋ねてみよう。「ロシアからの脱出に成功し、ドイツに特別に入国を許可され保護を受け、海外へ渡航して定着し確固とした生活基盤を形成するまでの援助、これら全てを我々難民は、ヨーロッパ及びアメリカのメノー派支援組織、ドイツ帝国政府、ドイツ赤十字社等の厚意に深く感謝する。個人では、帝国大統領フォン・ヒンデンブルク、在モスクワドイツ大使館農林参事官Prof. Dr. アウハーゲン、Prof. Dr. B. H. ウンルー、Dr. H. S. ベンダー、ゴルタ牧師等の御好意に依るものである。サンタ・カタリーナ州クラウェルの新移住地命名にあたっては、移住者の集会で色々な意見が出たが、結局当時の指導者ハインリッヒ・マルティンVの提案を採用し、我がメノー主義の創始者メノー・シモンズの誕生の地であるオランダのウィトマルスンの名を貸りて名付ける事になったのである

歴史的に考えて、人々に知れ渡っているためこの名前はまたパラナ州の新移住地にも転用された。(P、パウルス一世による記録)

1951年7月28日、ウィトマルスン有限責任会社(SAW)の全権代理人ハインリッヒ・ベルクは当時のパルメイラ市長ベンジャミン・マルセリに宛て次の様な書状を送付した。

1 ウィトマルスン有限責任会社(SAW)はファゼンダ・カンスラをロベルト・グラセルより購入した件。

2 カンスラはコロニー化を目的とする。小麦栽培、牧畜、果樹栽培を営み、乳産品の供給を行う。

3 SAWの社員は総勢80～100人でオランダ系農民である。(反独感情を回避する為)

4　パルメイラ市の発展の為協力を惜しまない。

5　「ウィトマルスン」の名称に関し、市議会が承認し、制定することを請願する。

1951年8月11日、市長ベンジャミン・マルセリに依る通達第30号に基づきカンスラはウィトマルスンに改名された。しかしカンスラの名はウィトマルスン組合の商標名として保存される事になった。

まもなく市長選が行なわれ、Dr. アルフレート・ベルトルト・クラスがこの職についた。新ウィトマルスン移住地は彼に対し最初に歓迎と感謝の意を表した。

彼は以下のように書いている。「今日ブラジルの発展にとり、農業はますますその重要性を持っているが、他方大都市の人々にとって食糧事情の悪化を生んでいる。それゆえ我々はパルメイラ市におけるオランダ系移住地が評価された業績のみならず、彼らの高い水準の教養を理由に歓迎されていることを強調したい。我々はわれわれの町を発展させた彼らの指導性を支持する。それゆえ我々の力の及ぶ限り、市長としてウィトマルスン移住地の発展のために力を尽したい。」

(6) 合い言葉は「前進」

ある農場経営者がウィトマルスンの土地を研究した。農務省が、250ヘクタールの小麦農場を実験農場として設置することが約束された。アブラム・エンスは最初クリチーバにウィトマルスンの人々のために土地を購入していた。彼は1951年9月13日付で次の様に書いている。

「新ウィトマルスンは楽しかった。三軒の家が短時間のうちに建設された。私は運命は選択できないが、人々の意のあるところが、その人の楽園である。カスドルフ家とハインリッヒ家は注意深かった。ウィトマルスンでは沈滞ムードはなかった。さもなければ我々は崩壊するのである。」

入植直後の種蒔の季節にひどい旱魃に襲われ、ジャガイモの栽培が危ぶまれた。

エンスは新移住民にこう語りかけている。

「頭を上げよ、下を向くな。さもなければ破滅の途が待っている./ 後退はもはや許されぬ。前進あるのみである。全てをゼロからやり直すという事が一体今日想像することができるか。再出発 — 原生林を開墾しての20年を経て、再び新しい生活基盤を牧草地に創造する./意志の有るところに途は開ける./」この言葉はウィトマルスンの歴史が証明している。エンス氏は初収穫を買い取り、クリチーバで売り、生活必需品と家畜飼料の購入を手配した。

(7) クラウェルとの別れ

我が家はつい先日サンタ・カタリーナ州からパラナ州へ引越したばかりである。クラウェルと別れる淋しさは私にとってまたひとしおである。山間のクラウェル渓谷に囲まれた私のNo.75は小さいが、ここで10人が子供時代そして青年時代を過ごした。森で狩や昆虫を捕まえて遊んだ。森林を焼き払ったときは皆ムーア人の様に真黒になったりしたものだ。やがて山間の「ロノサ」(開墾地)の土の上で開墾作業が始る。樹冠のザワザワとすれ合う音、またクラウェル谷に嵐が吹くと枝のぽきっと折れる音と木のすれ合う音が我々にはまるで音楽の様に聞こえた。思い出深い「ロノサ」の土地を整理し、最後に竹管が炎の中で破裂する様子を見ながら、私は若き時代の故郷を惜しみ感慨深く思ったのである。

パラナ高原では全てが今までと違うものであった。冷たい風が吹き、雨が顔を打ちなぶる。住む家もまだ完成されていない。家畜小屋も建てなければならない。飢えた乳牛が冬の最中に屋外の水たまりで夜を越したとは今日ではとても想像できないだろう。しかしかっては現実はこうだったのである。これらは決して忘れるべきではない。母は子供達に森へ行って薪を拾って来るように言った。我々は乾いた枝や木を求めて方々捜し回らねばならない事もあった。暖炉の火が乏しいとそれだけ煙がモウモウと上りインディアンの狼煙の様であった。

新開拓地に我々はまずサツマイモを植えることにした。何百匹もの蚊や白蟻が頭の回りをブンブンと飛び、鼻や耳の中に入り込み、身体に着いた害虫を帽子で払い落としても払い落としても効き目がないのである。雨雲が空に広がり

やがて大地が洗い清められると、我々は急いで雨宿りに駆け出す。

当時ウィトマルスンの道路状態は悲惨なものであった。耕地には少し長雨が続くとすぐに一面水留りができる。それから道は底なし沼となり、ぬかるみの穴だらけとなった。しかし建築材料や引越し荷物を積むトラックはその中を6㎞の距離を3～4時間かけて運送した。この強行軍のためには、さらにもう2～3台を使った。

私は逃げ出してクラウェルへ歩いて帰ろうかとも思った。しかし後退する途はない。合い言葉は「前進」である。

最初のウィトマルスン入植者の一人であるヴィリー・シュネッペルは古いトラックを所有していた。泥のぬかるみと石ころの上をシュネッペル氏は車を運転した。古い荷車がここかしこでがたがたなり、モーターは、無惨にきいきいと音をたてていた。

彼はその車で立派に役目を果してくれた。建築資材や、飼料その他沢山の物を調達してくれた。

シュネッペル氏はクリスマス直前に町に車ででかけ、ウィトマルスンの人々がクリスマス用のたくさんの買物リストを持たせたことをおもしろおかしく語った。子供たちは大いに期待した。サンタクロースも本当に新ウィトマルスンにもやって来るのだろうかと。

遠くの方でトラックの音がした。彼はカンスラ向けのクリスマスイブ用の包みと贈り物を持ってきたのである。実際にシュネッペル氏は1952年サンタクロースに扮した。

(8) 家畜の群を追ってパラナへ

ヨハン・ヴォークト

家畜全部をトラックでパラナへ運ぶことはできないので、移住者等は群を追ってパラナへ運び込むことに決め、その役目に任ぜられたのがデビット・シャルトナー、アブラム・クロッカ・Jr.、ニコラウ・ペナー、ペーター・ヴァルケンティン、ペーター・ハインリックス、ハインリッヒ・ヨハン・ヴァルケンティンそれに私である。我々は1951年11月29日出発した。 我々が牛を追って

行ったと表現した方が適しているだろう。家畜は決して愚かではない。しかし家畜を追うのは我々である。しかし81頭の群が山脈を越す事は決して容易な事ではない。しかし意気は低下しなかった。我々は夜は御馳走を広げ陽気にハーモニカの音で疲れを癒し、8人のいびきの声高く眠りについた。

朝は4時に起床し出発の準備をした。やがて家畜も行進する事に慣れてきた。我々はトウモロコシ畑を通り、茨で行進を止められる事もしばしばであった途中親切なブラジル人の牧場に宿を貸り、あたたかいもてなしを受けた。ある日、牛が3頭足りないので方々捜したあげくその日は日曜日であった為、礼拝に行く人々の後をついてチャペルへ行ってしまったのだった。

気分転換の要素には事欠かぬ。雷雨、暴風・・・。あるポーランド人農家では夜を豚ややぎとともにすごした。ある晩には家畜が逃げ出し、次の日には1日かけてさがした。州境では検問の為苦労した。何日間も満足には食べていないので腹がぐうぐうなった。

我々はようやく小さな町に着いた。そこで、空腹をいやし、思う存分食事しようとした。金持の酪農業者は我々を子供の様に命令してあれこれ酷使した。そこに我々は夜までとどまった。残念ながら我々は戸外に野宿しなければならなかった。その日は月夜であった。

我々はどこかでたっぷり食事をとる事に決め、私は見張りとして残った。私は突然「今晩わ」という声に驚かされた。私は弾薬の込めてない18口径のピストルを突きつけた。すると人影は暗闇の中へ消えて行った。勇気と力がこういう行動を起こさせたのである。数日、旅は順調に続いたが、残るはあと3㎞という所で一頭の牛が死んでしまった。それが不幸の始まりであった。そしてウィトマルスンの我々の土地に入ると続々と倒れる牛が出た。その数は全体の4分の1ほどに上る。クリチーバに獣医を呼びにやったが、すべてはむだに終わった。これらの家畜は道中空腹の為、毒性の草を喰ったからだという事が分った。こうして我々の希望に満ちて企てられた13日間の旅は終わった。同志愛はすばらしいものであった。しかし結末は悲劇的であった。しかしクラウェルからパラナへの家畜の追いたては我々にとって忘れがたいものとなっている。

6. 移住地の建設

クリチーバのアブラム・エンスの仲介により農林当局より2頭の種牛を取得できる事になった。エンスはこれについて次の様に書いている。「Dr. リバスは、私の百頭の要求に対し多過ぎるとこれを退けた。私は彼にこの移民団はこれだけの雄牛を必要としている。その代りに我が州は多大の利益を享受することになるだろうと説得したが、彼は僅かに2頭の雄牛の許可証を発行した。我々は2頭の牛を得る為、カストロまで足を運んだ。選ぶ牛の数は僅か13頭、私はこの提供を辞退した。」

ウィトマルスンの作物の出来は悪くはないが、野鹿の被害が甚だしく時に怒りとなって表われた。我々は鹿狩りを自由にやらなければならない。

1958年協同組合はカラムベイとカストロランダのオランダ人から多数の純血種を購入し、乳牛の改良を試みた。この結果、牛乳の生産は急速に上昇し、移住地の発展に大きく貢献することになった。

パラナ当局はメノー派信者の移住地企業をよくバックアップしてくれた。このことは強調しておきたい。政府はさまざまな便宜を与えてくれ、明らかに好意を示してくれた。当局は飼料を廉価で提供し、道路建設用の機械の調達を援助してくれた。

また教育問題に関しても好意的態度を示し、小学校の午前中の授業で規定のポルトガル語の授業が遵守されるならば、午後の授業は任意のドイツ語授業を行ってよいという事であった。そして上級教育制度については、私個人の教育思想に基づく公的機関の設置が認められた。この事は我が移住地社会にとって愁眉の問題であった。

(1) 経済的成長

ロベルト・センツェン

クラウェルのウィトマルスン移住地の人々がパラナへ入植する際に、彼等はここの気候条件及び農地の状況について充分な経験と理解を欠いており、農学者のアドバイスもほとんど功を奏さなかった。そしてしばしば警告を受けなが

ら3年も経つと最後の備蓄残らず使い果たした。勇敢な彼等も絶望の果て、新しい生活空間を捜したが結局見つからなかった。

ウィトマルスン移住地の売買契約に署名された1951年6月7日から25年が経過した。パラナ州の高地には生活可能な移住地が今日存在している。これはいかにして成立したのか。

男も女も捜せた土地から日々の糧を練り出さんと奮闘に奮闘を重ねた。既肥の他化学肥料を用い土地を肥やし収穫が成るべく豊かになるよう、様々な手段が試みられ努力は実った。菜園には野菜が、野には果樹が成り、土壌に対する信頼が深まった。収穫は努力と勤勉によって増加した。最初の年は市場は生産された農産物すべてを吸収することはできなかった。スイカ、トマト、ジャガイモ、イチゴなども良き収入源であったが、乳業が何といっても最も安定した部門であった。

クローバや菜種菜の牧草は牛乳の生産を向上させた。サイロ貯蔵を開始してからはこれまでの2倍の乳牛をより少い土地で飼う事が出来る様になった。

当初の牛乳生産量は日平均2.5ℓ／頭／2.4haであった。現在では2.4ha当り5頭の乳牛で1頭当り年間生産量3,700ℓである。この割合は今後増えるだろうと思われる。

収入の増加の原因は他になお経済の合理化に帰する。良い種牛の交尾により家畜の実質を高等なものとし、純血種の乳牛の導入がさかんに行なわれた。乳業は今後もウィトマルスンの最大の確実な収入源であり続けよう。

近年は養鶏が新たな良き収入源として目標にされている。17軒の農家が養鶏を経営の基盤にしている。残念ながら市場の相場の変動がはなはだしいのである。

農業は年々機械化が進み、完全機械農業へ移行している。大規模投資も成功した例は多いが成績の振るわないものもある。

最も安全な方法は混合農業で、大豆、米、トウモロコシの栽培、養鶏、酪農、牧畜を相互に補完し合い、モノカルチャーから安定的基盤に立つ多角経営へと移行した。この為には、土壌に関する知識、果物・野菜の品種を知り適切な栽培計画を行う事、飼料の改善、高価な機械の導入などが必要であった。時間と

金がむだに費された。我々がいつも学ぶ気持を忘れなければ、そこには進歩と成功が尽きることはない。

我々が「祈りそして働け」というモットーに忠実に努力すれば、天の恵みが我々の労働と耕作地に宿るであろう。

開拓地に様々な困難が生じたとき我々の相談役として常に助言と理解そして励ましを与えて下さったのがJ. J. ティーセンである。彼の好意と例のないほどの尽力が次の手紙に反映している。

「土地の収穫能力はある。全移住地におけるこの移住地の位置は、非常に有利である。旧来のウィトマルスンの資産の清算は徐々にはかどっている。これは予見できる。移住地の様子は私に良い感じを与える。移住は規則的でかつ計画に沿っている限り、ほとんど危険はない。

経済状態や生活状態で、パニック的にクラウェルを放棄しなければならなかったなら、すべての点で、甚大な損害をこうむったはずである。移住地の指導者が教師層とともに大きな責任を負う組合をめざましく結成しなければならなかったし、メノー派教会組織と神が組合に対して存在しているように思われる。我々同胞が神の手に導かれて移住は生じたのである。神は我々を助けたのである。」

(2) 厳しい開拓時代

2つの事が同時に遂行された。ひとつはクラウェルの解体、そして新しいウィトマルスンの誕生である。本来は全コロニーが売却された後にクラウェルの共同会社を清算するのが最も望ましかったが、実際は協同組合の企業は莫大な損失と長期的弁済条件で早急に譲渡せねばならなかった。この為、組合は利子の支払や割賦の返済に窮することになった。未収金を回収する為の努力が払われた。クラウェルにおける取引先だけでも10万クルゼーロの債務が残っていた。協同組合は約1年半の間、資本を喰いつぶして生きてきたのである。それは丁度、解体から建設半ばまでの過渡期に当り、出費は積み重り、反対に収入は微弱なものだった。

農民達は飼料の栽培に望みをかけた。これは乳業経営を儲るものにする為の

条件であった。莫大な経費をまかなうことに対し、何の手だてもなかった。予定の時期までにコロニーを売却できた者は少なかった為、1回目の割賦金53万クルゼーロスを支払う事さえ難しくなり、米国の総務会議にグラセル氏分の債務を清算した後に弁済開始を延ばしたいと願い出たが、この願いが聞き届けられた。

なお、利子の返還期限が守られない事が数々であった事も特に追記しておく。

1952年9月6日には29家族がらウィトマルスンの生活を始めていた。晩夏又は冬に転住した者は最初がかなり苦しいものであった。夏に来た者は、家畜の為の牧草も豊かで、直にクラウェルより遙かに多量の牛乳を生産した。また彼等少数者は冬の飼料を貯蔵する事ができた。

1952年は冬が特別早く訪れた年であった。牧草や飼料も不充分で、おまけに乳牛が口蹄疫に罹った。仮の家畜小屋は未完成で、また新しい気候条件に順応できずに病状が悪化したのだった。生活を維持するに足るだけの収入が無く、多くの者は意気消沈した。

しかし翌春野焼を行い、青青とした新鮮な牧草が生え始め、乳製品の収益の増加により収入が上昇した。

ジャガイモの試験栽培では、人工肥料、家畜肥料を適切に与えれば土壌の生産性はすこぶる高い事が証明された。

乳製品の加工の為、仮設バター工場が設けられた。

1941年政府は法律により、ブラジルにおける外国人の協同組合制度を禁止した。これは折りしもＳＡＷ創設の原因となった。1951年この法律が廃止されると、組合には税制上の優遇措置が授けられるようになった。1952年10月28日、新たな協同組合を設置した。ＳＡＷは法人として生き残ったがその商業活動は実際上行われなくなり、1968年自動的に解散した。移住地の経済を安定化する為には利潤を上げる乳牛の家畜総数の中での割合をすみやかに高める事が先決問題であった。1953年7月1日までの種牛を含めた家畜総数は320頭であった。

ウィトマルスンの土地購入にはクリチーバの29家族が参加し、合計107世帯が土地を購入した。予備として400ヘクタールを確保し、これを当初は隣接する牧畜業者に賃貸した。地代で実業学校が援助された。新開拓地の中央広場

の本館は病院として使用した。看護婦一名が常時待機し、月1回医師Dr.ペーター・デュックが我々の健康診断にやって来た。病院を買う事ができるようになると、Dr.デュックもまたこの地へ移転して来た。

開拓地での仕事の面から見れば貧困と全く新しい環境のためしばしば失望させられた。

全て事の始めに困難はつきものである。我が開拓地とてその例外ではない。しばしば緊張を醸成する事態が起きても、それは大きな事を成す上で不可避な付随現象と見看される。建設し、耕すという主要な問題について我々は一致している。ここクラウェルにいる限り、ここを立ち去るということは考えられない。冷静な判断に基づいて、我々の新しい故郷の未来の繁栄への確信が確固としたものになるのである。この為には神の全能なる導きが必要であり、我々は前回の相克に負げず喜びを持って新しい村の建設に励む覚悟である。

(3) ウィトマルスンー共同体活動の成果

何が共同体を結びつけているのか。それは経済的利害、文化的目的を同じくするもの、あるいは社会的にかつ人種的に結合しているのだろうか。それでは十分ではない。それは宗教的動機、神への信仰から生まれねばならない。これこそ精神共同体である。この事を最も適切に解明している。H. A. ファースト博士の言葉を引用しょう。

「個人は共同体の中においてどの様に共同体を構成して行こうとするか最大の注意を払わなければならない。あなたがたはこのことを自己の体験から学んできた。個人は素養を高める事が大切であるとともに、家庭の中においても又、共同体社会においても信仰の生活を築く事が特に必要である。もし健全な信仰生活が病んでおり弱体なものであれば、共同体生活全体も病むのである。我々は、従って、新開拓地で人々の魂の救済に当る方々に特に天の全智が授けられる様お祈りする次第である。移住地の自治活動と説教師とが勇気を持って相互の理解に努められんことを願う。それがそもそも我が総務会議が貴方達を信頼し借款を授けた理由であるからである。」

経済的困難に因り移住地に危機が醸成され移住地が分裂する事は考えられる。

ウィトマルスン移住地は信仰により結びついているとはいえないが、すべては信仰に基づいている。ウィトマルスンを今日まで支える重要なる本柱は教区、協同組合、そして学校である。

ここにウィトマルスン繁栄の秘密が在ると指摘するH. A. ファーストは、「個人そして家庭そして共同体の健全な信仰生活は、経済的文化的繁栄の前提条件である。」と述べている。

1953年9月末、当時のウィトマルスン入植世帯数は63世帯である。当時まだ11世帯がサンタ・カタリーナに残留していた。既に百軒以上の住宅や家畜小屋が建設されている。家族はしばしば一つ屋根に家畜と住んでいた。鍛冶屋、建具屋、馬具屋が仕事を開始した。菜園も整備され、種々の果樹が植込まれた。販売の面で果物を収入源にしようと計った。

(4) 家畜の群

「当地の経済的可能性および物理的活動性は、これまでの居住地と比較すると遙かに優れている。学校制度もこの2年間の間に従来に比べさらに改善され、社会及び教会の関係においても我が移住地内では理想的な独立性を保つことができ、まさに移住地の道徳と慣習の水準は我々の手にかかっているという事ができる。

サンタ・カタリーナからの移転はほぼ完了した。残る3軒の家族もまもなくやってくるということだ。共有の財産はそこですべてが売却されたが一部支払いを受けていない所が残る。現在当地にはともに独立の家計を営む74世帯と7人の独身者、合計455人が住む。

この土地の風景もすっかり一新した。以前は植物の成育の悪い、いわば「はげ野」に僅かの屠殺用家畜が飼われていたにすぎなかったが、現在では村が4ヶ所、合計140軒の家々が並び、 — 但し、中央広場は数に入れていない — 耕作地や菜園がとり囲み、やがて牧草地の殺風景な顔が徐々に変化に富む豊かな相貌に生まれ変わるであろう。

個々の村々からは中央広場へ通ずる道が走る。毎日、学校へ通う子供達や乗物がひっきりなしに通行する。緑の牧草地には、色彩り鮮やかな家畜の群れが

見える。これら全て、ここに故郷を建設しようとする意気盛んなる活動、勤勉さ、そして固い意志の表われである。

もちろん物事を開始するにはしばしば困難と欠乏は付き物である。色々な所でその欠陥に泣かされるであろう。しかし、我々は我が組織のお蔭で経済的遅れを取り戻すことができた。同時にその為に失ったものも多く、再び回復する事はもはや望めないようなものもあることを忘れてはならない」(移住地指導者からDr. W. フレッツ)

家畜の馴化と新しい食物摂取の過程で多くの牛馬が死んだ。自衛策を講ずるために、家畜保険に入った。しかし不運にも当該農民は保険金庫から50%しか賠償を受けられなかった。

家畜状態の改善の為、協同組合は州銀行から85万クルゼーロの長期融資を受け、ウルグアイから純血種オランダ牛67頭を輸入した。

(5) 村の分割

ウィトマルスンの経済的発展を予想できた者はいないだろう。

村の区割はロシアの場合とほぼ同様の10区とし、各村は一世帯10ヘクタール区画として放牧・耕作を行い、残余は共同放牧地として40ヘクタールを当てる。

この方法はメリットとデメリットを生じた。柵を設置する費用の節約ができる事は大きな助けとなったが、協同組合は各コロニーの切れ目がはっきりしない為、銀行に金を融資してもらう際、土地の担保の指定に困惑した。その上、10ヘクタールでは間に合わなくなると耕作用の土地を需要に応じて拡大する必要から垣をめぐらした為混乱が生じた。

この問題は内部的緊張を誘発し、ついに1959年には山林田畑を分割し各自の土地を分離する決定が行なわれ、土地を扇形状に区分した村計画を作成した。この計画で、自已の土地を3～4ケ所に分散された者もでて問題となったが実質的にはこの区割制度は成功したのである。当初は村の懸案事項は村長が決裁した。1年任期の村長は自分の村の行政に手腕をふるった。村行政は次第に協同組合の統制のもとに置かれ、いわゆる「中央集権的」社会となり、村長のポ

家畜統計

年	雌牛	若い雌牛	子牛	雄牛	馬	家禽	豚
1954	507	257	128	32	122	1, 996	263
1956	599	262	213	17	156	3, 206	790
1958	792	326	363	56	179	3, 871	880
1960	822	440	288	29	183	3, 411	528
1964	1, 269	793	447	68	206	2, 588	312
1968	1, 870	968	524	99	174	24, 733	352
1972	2, 415	920	653	142	112	19, 000	207
1976	2, 937	1, 294	877	177	42	65, 549	617

乳製品生産高

単位：Kgs

年	牛乳	バター	チーズ	クリーム
1954	261, 489			
1956	775, 966	26, 409	26, 750	5, 092
1958	1, 099, 791	39, 068	36, 242	5, 642
1960	1, 474, 116	45, 000	40, 000	1, 000
1964	2, 304, 912	54, 192	25, 167	1, 691
1968	5, 196, 750	70, 460	24, 195	9, 421
1972	6, 907, 693	67, 825		2, 152
1976	8, 013, 574	50, 605		18, 919

栽 培 面 積

単位：ha

年	トウモロコシ	ソ バ	米	牧草地	果 樹	大 豆
1954	121	19	83	72	2, 821	
1956	117	195	131	52	2, 830	
1958	102	335	258	88	3, 925	
1960	260	533	552	312	4, 781	
1964	493	315	216	1, 284	4, 785	
1968	152	140	50	900	6, 000	
1972	113	41	155	2, 398	6, 000	
1976	539	145	719	1, 739	6, 900	2, 525

機 械 保 有 状 況

年	トラクター	コンバイン	搾乳器	オートバイ	自動車	トラック	冷蔵庫	テレビ
1954						3		
1956	4	4			1	1		
1958	20	20			2	1		
1960	18	19			4	2		
1964	35	35	20	98	31	10		
1968	41	40	65	119	76	10	37	2
1972	54	50	93	275	105	15	105	40
1976	114	89	111	339	186	19	163	109

ストの実際上の機能は失われるようになった。

村長の機能は上述の様に実質的に作用しなくなったとは言え、名誉職として残置された。村長の役務は決して容易な仕事ではない。道路の整備・保全の各集団への割当て、家畜の種痘、野焼きの実行、協同組合において村を代表する等に盛沢山である。

村長の役職は実際それ自体で完結している。村は最小政策単位であるが、共同体の福祉につながる広域的事項の決定にも多大な貢献を為した。

「この猪突猛進と形容するにふさわしい現勢のまっただ中で、賢明な統治者として計画者として我々協議会において常に重要な役割を担い、画期的経済成長の原動力となり、かつまた共同体の秩序維持の為、困難な局面に対処したのが村長であった。協議会は我が機構において最も難しい立場に立つ機関である。

協同組合は資力の乏しい家族に対し保証を仲介しその転住を助け、当地での土地購入においては支払いの保証人となり、家計の向上した者などは協議会の保証に拠り前払いを行うことができた。入居した最初の年は、乳製品生産の全経費を協同組合が負い組合員の経済の安定をはかり、次年度からようやく乳製品業者が完全に自已費用で運営できるようになったのである。

ほとんど例外なしに当初2年間は移住者はすべて協同組合より借金を求めたが、一部は生活のかてに、大部分は農業経営の建設と種まきのために必要であったのである。

学校、病院、移住地行政、製品の販売（特に最低経費で販売に結びつける）などは、協同組合の存在無しにはとても考えられないであろう。協同組合の役割は多様で複雑であり、理事会がすべての要求を満足させることは必ずしも容易ではない。入植一年目を全員の利益の為に常に休むことなく全力を尽して最大限に奉仕してきた協同組合も、当初の困難を克服し一応の成果を見ることができ、これからは敷きつめたレールの上を走りながら利益を得る態勢に移行して行くだろう。

組合員は様々な義務と莫大な債務を負っていた。債務はだんだんと回収されたが、協同組合は健全な財政基盤に立ち、移住地の繁栄のために有効な手段で役立つであろう。

協同組合が移住地経済に果す役割と同様教会の持つ役割もまた優るとも劣らぬ大切なものである。我が教会は旧移住地の新教ルター派教区に譲渡し、以って当地の教会建設の費用に当てた。（10万クルゼーロ）。

7. 活動する共同体

協同組合への反対論もしばしば聞かれるブラジルに生まれた協同組合の中には、破産したものも少くはない。

そこで、では一体何故この様な成功や失敗例が生じるのかという当然の疑問がある。

そこで協同組合の主要な特徴を挙げてみると、

a）組合員の指導層にかける信頼

b）団結力

c）建設する意志

d）各個人の他人を援助する覚悟

e）同一利害社会であること

などがある。協同組合は中間取引を排除し、正当な社会所得の分配を保証し、弱い者の声を取り上げ、組合員の利益を代表する。

ウィトマルスンの協同組合は、会長1名、事務局長1名、書記1名を執行部とする。さらにこれに2名を加えた理事会が置かれている。協同組合の管理下にある営業種目は、乳業、飼料混合業、スーパーマーケット、飼料倉庫および農業機械販売業、ガソリンスタンド、家畜購入・売却及び登録用事務所、人工授精園、病院、学校、道路建設、自動車修理工場である。

酪農も手搾りの時代からやっていたが、間もなく生産が増大し、1964年・搾乳の電動化に伴い新たな酪農が始まった。衛生管理、冷蔵室および貯蔵タンクの設置、牛乳の低温殺菌、プレパック・マシンによる衛生パック、清潔な水を得る為の掘り抜き井戸の設置など、これらは工場長やコプ・ギースブンヒト協同組合理事会の努力の賜である。経済の大動脈である酪農を販売競争に通ずるような強力なものに育て、商標「カンスラ」の評判を高め、生産者に安定した利益を保証する為多くの信用貸しを受領した。

ヴィトリア商店はクリチーバでのウィトマルスン製の産物の販売所で、長年エルネスト・ヴニーアが営んでいたが、25年間常にウィトマルスンの人々のたまり場となっていた。

ヤコブ・ボルトは長い間、協同組合のトラック運転手として、チーズ、バター、卵等の製品を運搬する役務を勤めたが、その荷物を座席としてウィトマルスンの人々はバス代りに利用した。自動車はこのトラック以外一台も無く、カサ・ビトリアで品物や石油ドラムカンなど満載すると、その僅かな空間に、乗客が立つたまま乗るのである。当時クリルーバに行くのに約3～4時間かかった。そのため朝早く家を出て、夕方遅く帰宅したものだった。

建設する意欲、自己批判、酪農装置のたゆまぬ改良、純血種種牛の購入による家畜水準の向上、緑草地帯の敷設、サイロ貯蔵の導入などこれらすべては、協同組合の最新式酪農方式を実施するという新しい方針に基づくものである。この方式により、毎時1万リットルの牛乳が生産されるようになった。その費用450万クルゼイロは組合に負うものである。組合員数は毎年増加しており、1976年現在145人である。1967年以来協同組合は夜間警備員を置いている、というのも何者かが事務所に侵入し、金庫を運び去ろうとしたからである。

家畜の売買、登録、予防接種のために常雇いの人手がいり、家畜事務所が設置されたコルネリウス・パウルスが1966年この地位につき、後にはヤーコブ・イサークがこの仕事に任命された。家畜品評会がクリチーバ郊外のカステロ・ブランコ公園で開催されるが、家畜の売買の面で重要な意味を持っている。ウィトマルスンも1965年3月ようよくクリチーバの家畜品評会に参加した。

(1) 移住地の電化

ウィトマルスンの経済発展の状況に応じて電気供給の面も考えなくてはならなった。パルメイラ市は我が移住地の為に、第5村近くの休止している発電所をウィトマルスンで利用する様に奨めてくれたが、我々住民はCOPELの高圧線を連結する方を選ぶことにした。農務省の下部機関（ブラジル農業開発院）はこの計画に融資し、COPELにウィトマルスンの中央広場まで電線を開設する様命じた。

配電所として、ウィトマルスン配電会社が設立された。これは現在なお存在してエネルギー供給を管理している。

「経済的発展はまた建物の建築方法、生活様式の上にも反映し、自動車や機

械の購入が増加した。

建設の方式はウィトマルスンの伝統的な木造建築と近くの4つの村落の近代建築と施設が代表している。それらは変化している根本様式と現代の経済傾向の表現である。

(2) ドイツ開発サービス

他の多くの移住地同様、ウィトマルスンにも訓練された専門家が種々の分野で不足していた。ドイツ開発サービス(DED)は適宜にウィトマルスンを訪問し良き指南役を務めたのである。

1966年1月1日、営農家1名、機械技師1名、家政学校教師1名、幼稚園教諭1名合計4名の若者がウィトルマルスンを訪ねた。これはウィトマルスン協同組合が計画したもので、費用、住居、ボランティアの雇用など一切を引き受けた。

ウィトマルスンの農民は精塊かけて働きその実りを貯蓄に残し、自己の営農の水準をある一定の高さまで向上させたが、いよいよ職業教育を受けた農業専門家獣医の指導により産物の出来ばえと製品の質の向上を計るときがやってきた。ブラジル政府は、ドイツ開拓援助団がドイツ系ブ・ジル国民に効率の高い開発援助を行っている事を教えてくれたのであるが、ウィトマルスンでは「自助」の精神が行き渡っていた為、比較的微小な援助を受けるのみで間に合った。

(3) 自　　治

移住地としてウィトマルスンは元来州の中の小都市国家である。ロシアで我我の祖父達が享受できた特権、又は他の多くの国々におけるメノー派の人々が享受している優待権とも縁遠い。但し、我々は協同組合という機構を介する実際的な自治体である。法律問題を法律と直接関係のある問題は関係当局の統治するところであるが、学校制度、病院建築、道路建設等々はすべて特に我々内部で決定されている。勿論、学校制度は州の義務に相当するが、州にはたくさんの幼児がいたためほとんど干渉せず、協同組合がこれを引受けなければならぬ状況であった。また、もしウィトマルスンが自発的に道路網の整備に当たら

なければ、牛乳運搬は雨天時には麻痺し、道は泥沼と化したものであった。

自治はそれ自体に幾多の利点を有し、組合の利益の為に役立つ。しかし同時に緊張を生み出す。反対派の存在は、健全な反対である限り社会の改良派の役を果す。しかし、激しい論争の果て家族間の敵対心が生まれ時を追うごとに高い壁となり、益々友和の途が遮れる傾向にある。

約20年間協同組合会長ペーター・パウルス一世は自らの職を有効に行使していたが、1969年5月29日ペードロ・ザヴァツキイが組合員総会でこの職に選出された。ハンスボルトが事務局長として地位に就いた。両人とも2期選出され、現在も協同組合で責任ある地位にいる事務局長としてウィトマルスン協同組合は次の人間を雇用している。ペーター・ニッケル、ユリウス・レギーン、ヤーコブ・ギースブレヒトそしてデュックである。フランツ・クリーバーは18年間書記の地位を占めていた。彼の後任はアルノ・エッブであった。現在はホルスト・グンター・クリーヴァーである。ブレッド・J.ボルトと彼の娘アンヒエンが組合の簿記係であった。すでに20年来この仕事についているため、彼女は新ウィトマルスンにおいてもこの組合の仕事を非常にうまくこなしている。

1948年P.パウルス一世がデビット・ニッケルの後任として移住地の指導者の座に就いた。彼はウィトマルスンのパラナ移住に係る全てを体験し、かつ導いた人である。

彼が当時物した書翰、クラウエル及びカンスラの状況報告、理事会議事録、総会記録は当時遂行されたダイナミックな仕事の証拠である。移住地指導者ほど自らの家族を犠牲にしている者はなく、この犠牲は全体の幸福のために払われていたが、家族にはなかなか理解されない。しかし他方、彼は移住民の全信頼を受け、その証拠として何か基本的な問題に関するときほとんど反対される事がなかった。

カンスラの購入という責任問題に際しては多額の借金を負い、債権者に返済期限の延期を求めて日参し、教区民の保証人に立つなどということは非常に重い責任である。我々は今日、歴史に刻まれた、広い見識、決断力、責任感に満ちた指導者達に深く感謝するものである。このような認識が時として貴重となるのである。

責任あるポストを無秩序にだれにでもゆだねることは軽卒な行為である。

我々はそのポストにふさわしい全体の福祉の為に尽くす心構えと時間とエネルギーを持った人にこの責任重大な役目を担ってもらわねばならない。

個々の人間の努力が歴史にとって今なお常に決定的である。ウィトマルスンの人々に共同体のためにずっと尽力してきた。ウィトマルスンの人々は共同体のために指導者に全幅の信頼を置くと同時に、将来のために、共同体の仕事をする有用な人物が獲得された。

移住地の独立性を維持する為、協議会はその定款に基づき、その活動範囲をウィトマルスン内に限った。なぜなら外来の要因によってクラウエルの移住地の独自性が奪われる悲劇を予防したかったわけである。当初は土地の権利証も協議会が保留した。1975年ようやく定款の改正によりウィトマルスン境界外からも組合員を受け入れることになった。

以上の事により酪農の機械化を全面的に開始する条件が整えられた。これはまた金融銀行、" CONDEP "の新開拓地の農業入植者への信用貸し条件であった。

一つのコミュニケーション手段として1971年ウィトマルスン協同組合に電話が設置され、外界と直接に連絡がとれる様になった。ウィトマルスンの道路の整備は特別な問題である。協同組合の年次総会で独自の基金を創設し、協同組合の助力で多大の費用を投入して移住地の道路網を維持することが決議された。1955年にはウィトマルスンの人々の道作りの無償集団労働奉仕日数は2000日を越えている。ウィトマルスン道路監督を数年来務めているのはハインリッヒ・カスドリフである。常設の道路建設隊の道路維持によってウィトマルスンの道は雨期にも通行可能である。ブルトーザの購入、砂利を運ぶダンプカーの依頼、架橋工事の実施。道路工事に支出した金額は1975年度合計 216604.47 クルゼイロ、この内、協同組合員一人で 162000 クルゼーロを負担した。

1971年ウィトマルスン協同組合は、パラナ協同組合連合会に加入した。この連合会は、フリードリッヒ・ノイマン財団の後援に成るもので協同組合に助言を与え、指導的な職員の養成を目的としている。

カストロランダにあるオランダ系のカランベイセンターは巨大な資本量を駆

使し、協同組合としては内部組織も固くブラジル南部諸州にまたがる広い販売網を有する。我がウィトマルスンはカランベイ中央協同組合と合併すべきか否か、再三討議熟慮した。もし、経済的理由のみで決定されれば合併したであろう。我々は独立性を堅持し、純血オランダ牛の購入以上の関係を持つ事を避けた。

一体人々は、この独立性を維持し、道路を建設し、自前の学校や病院を建て運営して行くことがどんなに長く厳しい道程であったか考えが及ぶだろうか。

8. 協同組合の設備

(1) 屠　殺　場

協同組合の屠殺場では1974年までヒナドリを扱っていた。しかし州の規制条件に適合せず採算がとれない為、閉鎖しなければならなくなり、ウィトマルスンの養鶏業の人々はポンタ・グロッサのプリンセッサ養鶏会社と提携する事を決意した。この結果、ウィトマルスンは屠殺場を経営する許可を得たが、ヒナドリの販売をクリチーバで行う事が禁止され、クリチーバは最大の販売市場である故、これは何ら問題の解決にならぬものであった。

新しい屠殺場を建設することは以下の事を考慮すると推進されえなかった。

1　高い建設費用と費用高の施設

2　企業を経営してゆく人材不足

3　酪農業を振興することが優先する

商品取引、飼料、肥料購入のために、1970年に協同組合の経済センターおよび管理センターが設立された。

ここには事務所、郵便局、スーパーマーケット、集荷場が入っている。

(2) 乾燥場とサイロ

協同組合はトウモロコシの買付けを多く行い、飼料の供給に備える必要があった為、適当な貯蔵庫が不足していた。また、小麦、米、大豆等の農産物の乾燥用の設備が必要であった。そこで1974年乾燥施設とサイロ5基（収容能力1100トン）が完成した。1975年、サイロと乾燥施設の稼動により約300万クルゼーロの売上高を記録した。

(3) アカルパ（ACARPA）

近年パラナ州及び連邦政府は、農業、牧畜、及び酪農の振興に乗り出し、まずまずの効果を上げている。PLAMAM及びACARPAはウィトマルスンに事務所を置く州機関であり、融資の仲介、申請の審査、中央銀行への転送などを行っている。特に対象とされているのは、家畜病の予防と害虫駆除、牛乳検査、

適切な飼飼、品種の改良、乳牛の登録、人工受精などである。また獣医1名は協同組合及びPLAWANが合同で報酬を払っている。これらの制度により個々の農民及び協同組合は非常に利益を得ている。1975／76年度は次の計画が助成を受けた。家畜小屋、倉庫、サイロ、乳牛、トラクターおよびアタッチメント、搾乳器、放牧地の緑草化。

43世帯及び協同組合に与えられた信用額は11,532,415クルゼイロであった。

1976年現在の協同組合従業員数は80名を越え、多くの者はメノー派信者ではない。彼等は職を捜してパルメイラや他の町からウィトマルスンへやって来た人々である。

これらの労働者は、組合員と同様の社会保障を享受し、なお負担すべき割合は組合員より少い。例えば、労働者の子供は学校の授業料の最低範囲を払うだけでよいし、教育を受ける機会はウィトマルスンの子供達と同様に与えられている。病院の利用、及び医療サービスについてもまた然りである。

(4) 病　　院

25年前、ドン・ロベルト・グラッセルは、自分の屋敷「カサ・グランデ」が病院につくりかえられるとは夢にも思われなかったであろう。

Dr.ペーター・デュックは20年間開拓地で欠けがえのない仕事をやって来られた。彼はかってのファゼンダ館の一角に住み、多くの患者の治療に当っている。70年代の初めになってその責務はDr.タドー・グロックスに委ねられた。

Dr.デュックは、1935年以降クラウエル開拓時代から医師として奉職された。我々は彼の人間への偉大な献身を深く感謝し、永く称え続けるだろう。サンタ・カタリナの原生林の中では彼を除いて外には助けは得られなかっただろう。ウィトマルスンの人々はこのことを決して忘れないだろう。病院がクラウエルに購入された際、デュック医師もパラナへ転住した。

目下、この家には良き霊が住んで奉仕して下さる。レーナ・ハルダーは数年来、炊事、洗濯等病院の日常一般をきりもりし、注射や治療、医療品の購入や看護を行っている。彼女は電話をかけて、入院している患者を見舞うように勧めるのだった。医療と看護婦が治療し、レーナが管理している。レーナがいな

くては病院はなりたたないのだ。

1975年度における病院来訪者数は380人、処方箋扱いが430人となっている。また看護婦マリーア・ペナーの所で軽い治療を受けた者は2750人にのぼり、セルカド（囲い込み地）及び周囲のファゼンダから治療を受けに来た者は300人、また注射の数は2200本である。

我々の病院は診療所であり、病院であり、また救急医療も施し、その役割は幅広く重大である。看護婦のマリーアはここで唯一人の看護婦として長年献身的に奉仕してきた。この行為は移住地全体に価値あるものと認められてきた。難しい外科手術の場合は近くのクリチーバかパルメイラに移して行った。

9. ドルの返済 ―多難な途

ロベルト・グラセルに対する返済は65年6月7日に完了し、フアゼンダは協同組合に譲渡された。次に待っているのはドル借款である。然し、この4年間はドルのレートは30クルゼーロから90クルゼーロへ高騰した為、ドル債務の清算は大問題であった。そこで総務会議に第1回返済期を1年間延長するよう依頼した所、支払をあと2年間猶予するとの回答を得た。

ドル債務の償還は60年代にまでおよんだ。仮にアメリカ側が我々の開拓当時の悪条件を理解してくれていなければ、ウィトマルスンの発展過程は遙かに鈍いテンポであったであろう。また1966年7月28日、総務会議は「残り7361.40ドルの負債を帳消しにする」とのうれしい通知を発した。すなわち総務会議は高額を寄付したことになる。同じ通知の中で「神の教えを国、ウィトマルスンに広めよ」と述べられている。負債を免除されたかわりに新しい仕事に取り組むことになる。ウィトマルスン移住地はそれ自体が目的ではなく、個人として共同体として任務をおびているのみならず人類への奉仕と救済の意味を持っている。

我々が出口が見つからずにいたとき、神は我々に救いの手を差し延べて下さった。エゴイズムや、貪欲さから人間を幸せにするのではなく、神の意志のままに自らのパンを飢えた者に分け与えよと教える神の言葉を我々は広く人々に伝えたいと今日考えるのである。

(1) 25年経た今日 ―再び土地を求めて

25年前、ウィトマルスンの入植が始ったとき、子供の為の予備として第5村は残しておいた。第5村は初めクリチーバのメノー派が購入して入植する予定だったが後に撤回した為、ウィトマルスン協同組合が買い戻したのである。しかし、もはやこの地もメノー派人口の増加に困りすき間なく登記され尽くすのに、それほど時間はかからなかった。

最近再び移住地を成長している世代のために新たに求める要求が強まってきた。とりわけこれは子供を持つ親にとって重要な意味を持つ。ウィトマルスンはこれまでの経験で、利用価値の無いと言われて来た原野を耕作地に作り変え

豊かな実りを得る事を実証した。この為、隣接するファゼンダの土地の値段が著るしく騰貴し土地購入は問題にならなくなった。実際、このファゼンダ・アレグレーテとファゼンダ・ダ・ボイアダは3年前に売地として提案があったところである。

ウィトマルスンの外のあちらこちらに小麦栽培のための広大な土地がばらばらに賃借りされた。5年前からは南のマット・グロッソ地方を賃借りして耕作する者がでてきた。2家族がサンタレンークヤバ街道の原生林の中の町シノピに移転した。こうして集団から離れることは経済的多くの利点を持っているが、我々は常にメノー派共同体として生きなければならない。このことは他の周辺社会へと消滅していくことを意味している。そこで我々は分裂を回避する為、目下の所、マット・グロッソの北方に新しい移住地を建設し移転する計画を練っているのである。

(2) 学校 ——共同体の支柱

学校を欠いたらウィトマルスンは考え難い。何故なら学校は移住地建設の目的のひとつであったからである。独自の学校を建設し運営する事、特に教育科目の選択において、メノー派の伝統をはっきりと打ち出すようにすること、これらの点においてパラナの教育庁はサンタ・カタリーナより寛大であった。新ウィトマルスンでは私立学校制度はすぐに順調に歩み出した。

パラグアイからDr.フリッツ・クリーヴアーとDr.ボストマを招聘し、学校を組織し、教育計画を立てる仕事を依頼した。こうして、戦争中政府の手によって管理されていた学校制度もようやくパラナにおいてメノー派独自のものとして再生したのである。1952年、最初の教師として、ヨハネス・ヤンセン翁が25人の生徒を受け持ったのである。

Dr. フリッツ・クリーヴアーは1956年心臓発作の為、あまりに早くこの世を去った。彼は短い3年間の間に活発に働き多くの共同体の活動に取り組み、彼の意志は今日でも共同体の活動の中で生き続けている。例えば青年余暇活動は私にとって忘れる事ができない。

雑誌「聖書と農耕」の裏に隠された努力と精力、理念は測り知れないほど大

きなものである。今日では南米、ヨーロッパ、カナダのメノー派信者をつなぐひとつの懸け橋である。

フリッツ・クリーヴアーが最も精塊をかけて築いた学校は、古いフアゼンダの家畜小屋を改造した建物を本体とし幾つかの別棟がある。幼児の楽しげな声が聞こえ、校舎に歌がこだましている。Dr.ボスレマは語学と数学を教えるかたわら、教区の説教師として青年達を指導したが、1957年末にオランダへ帰国した。彼はウィトマルスンの高台に家族と一諸に住み、居住区域には外国の学生が住んでいた。

ウィトマルスンの学校はパラナ州の農業移住地の中で、独自の地位を占めている。教育制度は、幼稚園・予備学校ではドイツ語で学び、4年制小学校から引き続きギムナジウム（ドイツ方式の中・高等学校）へ4年間通う。

1960年以前は、中等学校はEscola Secundária と称しカリキュラムはギムナジウムのものでドイツ語で科目を学習する方針であった。学生にとってはこの卒業証書では他へ進学する場合に認められないという問題があった。

1959年校舎の増築を行った。1960年本校は初等教育施設として州の認可を受けることになり、生徒は公的に承認された卒業証明を与えられ、他の生徒に比べ不利益をこうむらなくなった。これは、1960年になってようやく可能となったが、それまでブラジルの大学で正式な教員免許を取得した教師を擁していなかった為である。

師範学校は出来るだけ短時日のうちに小学校教員を養成する目的を有していた。1967年、師範学校を改革して正式なギムナジウムが設置された。同じ年、新教中央本部の援助により校舎を改築し定員100名増となった。

フリッツ・クリーヴアー・スクール（学校の名称）ではとくに一般科目の他にドイツ語修得に力を注ぐ方針が貫かれている。幼稚園から8年生まで宗教教育、歌唱、楽器および農学に力点が置かれている。1964年州当局はウィトマルスン小学校でドイツ語授業を行うことを許可した事により、学校休み、映画上映、音楽演芸、遠足、リオまでの修学旅行がカリキュラムに含まれて一層教育が実りあるものに構成されていった。

1975年以来、ウィトマルスンでも全国の例にもれず学校改革が実施されている。

1976年現在生徒数を分類してみると、幼稚園19名、予備学校24名、小学校120名、ギムナジウム113名となっている。

常勤の教員10名、非常勤の教員は5名、1975年以降、学校長を勤めるのはジークハルト・エップである。学校長を補佐する学校顧問が置かれ、教師の招請や管理を役目としている。15名の教師のうち4名はメノー派信徒ではない。

フリッツ・クリーヴァー・スクールへはウィトマルスンの5つの村及びフアゼンダから生徒が通学し、共同体の共有によって維持されている。

学校評議会は学校長といっしょになって先生を捜し、SECに勤務を推せんする。「ヨハネス・ヤンセン」小学校および「フリッツ・クリーヴァ・ギムナジウム」の目的：

1. 若者に良き教養を身につけさせること。
2. ブラジル教育要領全課程の教授
3. 上級学校の進学準備。
4. 子供達が2ケ国語を話せるようにする。
5. 農業教育、音楽教育、およびメノー派の歴史の理解に重点を置く。
6. 集団生活への健全な順応を助け、郷土への愛着、先祖伝来の文化遺産を継承する。
7. 子供達にキリストの精神を理解させ、身に付けさせる。宗教教育を充実する。
8. 若者に共同体に対する責任を自覚するよう導く。

10年前は未だギムナジウムに通う子供は多くなかったが、現在では全ての生徒がギムナジウムに進み、1976年には58名の卒業生がさらにリリチーバ、ポンタ・グロッサやパルメイラの上級学校へ、また大学へ進学した者も11名いる。

かって農民の子どもは農民になるべきであった。これはもはやブラジルのメノー派信者にはあてはまらない。職業の選択の途も多様化し、技術者、教師、公務員、サラリーマン、エンジニアその他に拡大している。学校は新しい精神の源であり、ウィトマルスンは学校なしに考えられない。移住地の経済・精神・社会・文化を発展させる新しい推進力と刺激の源である。

ウィトマルスンの学校は創立以来ウィトマルスンに限らず周辺に住む子供達にも同等の教育的機会を与えるという原則が守られてきた。近年、ウィトマルスン周辺に定着する賃金労働者の数が増加し、授業料を納付できない子供が年々増え

て来ている。非メノー派の生徒がクラスの40%を占めるクラスも少くない。

数年前までは、子供達は何キロもの道のりを徒歩で通学した。雨天の日は河を歩いて渡るのが難関であった。やがて馬車を通学便に使用するようになり、トラックやフォルクス・ワーゲン・ステーションワゴンと変わっていった。今日ではスクールバスが文字通り戸口から戸口へ生徒を送迎している。当時と今日の何という差であろう。忘れることなかれ。

学校は文化の担い手たるべき課題を負っている。今日ウィトマルスンでは40種類の異なった新聞が定期講読されている。各家庭が大きな負担をして学校を維持しているのも効果があるからである。幼稚園から8年生まですべての児童がウィトマルスンで学び、町へでて行く必要はない。個々の教師が自らの信念に基づいて子供を教育しているのである。広くて施設の整備された校舎、膨大な図書、工作道具、設備、備品、運動場、楽器は児童が自由に使える。

25年前生徒が一冊の新しい本を購入するのも大変であったが、現在ではリオまで自動車で旅行をするのです。学校を活気あるものとし、維持してゆくのにどんな犠牲もいとわないウィトマルスンの父兄に感謝している。ウィトマルスンの学校は文化の源であるのだから。

精神力がみなぎり、若者が統治されるこの場所こそ人生においてそこに学ぶ者を価値あらしめる。

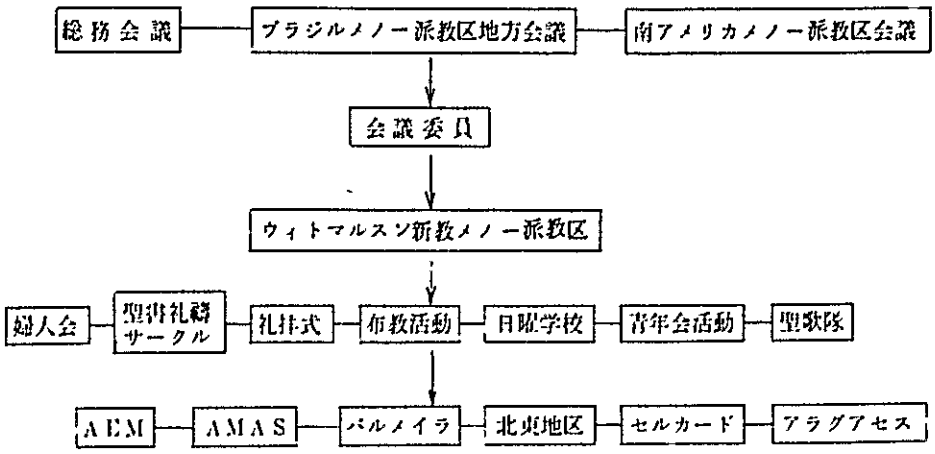
(3) 教区民としての生活

移転当初、礼拝はかってのフアゼンダ館で催された。その後1963年まで、学校校舎が礼拝場として利用されていた。教区は2つに分かれていた。ひとつは自由新教派教区、他のひとつはメノー派教区である。両者は合同で祭礼を催し、日曜学校を開き、青年会や聖歌隊を構成した。但し、聖餐式は別々に行った。

自由新教派教区はヨハネス・ヤンセンを長老とし教区リーダーとしてアブラム・デュック一世を有し、メノー派教区の長老はデビッド・ニッケル、説教師としてヨハン・ボルトが居た。

1958年、自由新教派及びメノー派教区の一部がウィトマルスン・メノー派同胞教区を設立した。移住地内ににわかに緊張が高まり、ついに1966年自由新教派

教区及びメノー派教区は一個の教区に合併する事を決議した。すなわち、ウィトマルスン新教メノー派を名乗る事になった。



その新しい教会堂が2年前に完成した。これには教区民館及び牧師の住居が付設されている。

この大規模な建築を完遂する為、全教区民の献身的な奉仕と自発的な多くの労働奉仕が必要だった。この教会堂は総務会議に資金を融資して貰い竣工までに4年とかからなかった。

ウィトマルスン新教メノー派教区は、クリチーバメノー派教区と共にブラジルメノー派地方会議（AIMB—Associação das Igrejas Mennonitas do Bracil）を構成し、高次の問題を討議し、決議を行い、勧告を発する場となっている。南アメリカ地域においては3年毎に宗教会議が催される。

新教メノー派教区は次の各分野に分けられる。布教活動は全体のカナメであり、これをパイプ役として教区は幾種かの慈善的布教奉仕や教育奉仕と結びつけられている。AEM（Associação Evangélica Menonita 新教メノー派協会）及びAMAS（Asseiação Menonita do Assistência Social メノー派社会奉仕協会）は、パルメイラに本部を置きウィトマルスン教区が後立てをしている。パルメイラでは牧師テオドロおよびスージ・ペナーが総勢60名の若い教区を世話しており、AMASはそこで保育園（園児150名）を運営している。さらにウィトマルスン新教メノー派教区では、ブラジル北東地域におけるボラ

ンティア活動、アマゾナス盆地での布教活動にも積極的に参画している。

(4) 布教奉仕

1958年、ヨハネス・ヤンセン翁の提案でウィトマルスン青年グループのひとつが移住地周辺地帯で布教活動を始めた。手始めにヴオルガ・ドイツ人のコロニーケロ・ケロで礼拝式を催し、漸次その領域が拡大され、ジャカレイ、ツル、フェレリーニャ、ブガス、ヴイラ・ヴェーリャ、マット・プレート、カパン・アレグレーテ、セルカード及びパルメイラにおいて行われた。最初の洗礼式は1965年10月10日リオ・パパガイオスにおいて15名が信仰を告白して洗礼を授けられ教区の一員となった。時には常勤の労働者が雇用され、パルメイラでは児童福祉施設の活動と密接に結びつけられた教会が設立された。

南米メノー派はまだ強く伝統に従い俗人説教師であるが、我がウィトマルスン新教メノー派教区は別の道を歩むことになり、3年前から牧師を常勤で雇っている。初代は牧師ヘルムート・フュルステナウが就き、現在はヒルマー・フュルステナウがその任に在る。

教区では教会暦に従い祭日を祝う。メノー派区民数は現在202名。日曜学校に通う子供140名、青年会活動に参加する若者は80名ほどである。

1976年3月、メノー派同胞教区の新しい教会堂が落成した。同教区民数は104名、日曜学校生徒数40名、青年会員34名である。教区リーダーは説教師デビッド・センセンが勤め、アブラハム・デュック説教師を務める。

またウィトマルスンには、小規模ながら新教ルター派教区が存在し、その祭礼式は新教メノー派教区教会でクリチーバの牧師によって催される。ウィトマルスンの名称は何度も我々の歴史の始まりを思い起こさせる。我が宗教団体創立者、洗礼者、クリストの後継者、再洗礼派の相続人メノー・シモンズを想起させる。

我々は自己を目的とはしていない。共同体として我々は神との信頼と服従の関係にあるのである。我々は新しい土地を選択した、そしてそこを耕作している。今や我々には神の恵みがもたらされ、我々の土地と民のために寄与している。

我がメノー派の歴史は、経済的に繁栄するようになると、宗教的生活は低迷沈滞するという事実を証明している。我々は、キリスト的共同体として持つべきビジョンを失っているのである。ブラジルでは我々にとっても物質的なものが優位を占めている。我々はキリスト教社会が持つ存在能力を有し、また存在意義あるようビジョンを失ってはならない。

パラナ州ウィトマルスンのクラウエルのメノー派の歴史は不和、分裂、対決といった幾多のいまわしい話題でおおわれている。そういったことに固執したり、旧悪をあばくのが課題ではなく、共同体や移住地のあらゆる分離のうちに、平隠、共存、相互依存を求めるのがむしろ我々の任務である。

振返ってみれば、コップの中の嵐のようないざこざがたびたび我々の気をひいた。どれだけの精力・時間と力が時態改善にではなく内部の不和のために浪費されたことか。

我々の短い歴史から以下の何物かを学ばねばならない。不和とか対立がもたらされるのではなく、我々の地域社会、移住地、学校、協同組合の建設および社会と教会の仕事に力を合わせて努力してそして我々にとり祖国となった国土ブラジルの建設に寄与するために。

メノー派信者よ目をさませ、祖先の御教を守り、信仰を照らす灯となれ！

10. 個人体験記

(1) 「聖書と農耕」の由来

人間の思考及び行為の最高の表現は、真の共同体の維持であるとも言えよう。真の共同体とは同一の志向の者が同一の目的の為に努力して初めて成就できる。聖書の教えに基づき我々は人間の世界にも神との共同社会を創造することができる。

真の共同体の維持は神に由来するものであり、誠の隣人愛を根源とし、人間関係を普遍的に高め実りあるものにすることである。しかし、激しい闘いや大きな犠牲なしに、善・真を握る事はできない。善と悪は常に相対している。この事実を正しく理解する者は、共同体の為、神と共に友と共に身を献ずる使命に照らされ、真すぐな気持でどんな犠牲も覚悟の上で信仰の闘いに加わるのである。

この目的の為、前戦部隊は団結して進まなければならぬと、次の詞は言っている。

小さな炎がバラバラに燃えたところで何になるか？
手に手をとって、松明を集みよ。
胸に炎が燃えさかるのを感ずる者は
すべて兄弟として結ばれるのだ。

南アメリカに住むメノー派共同体の同胞意識は終に「聖書と農耕」となって現れたのである。南アメリカの移住地は地理的に遠く、コロニーの中においてさえ連絡が不便であり、又年々都市で働く者が増え、相互の交際や共同体維持が段々難しくなり、これは個人ばかりでなく全体が駄目になる危険さえ見え始めている。

人間というものは相当な長い期間の類推化過程の作用により周囲の環境に似た産物の様に現出する事は確かである。身近の環境が改められると、今度は外界の環境が否定的に働く。

1975年1月、「聖書と農耕」第1号が発刊され、部落や居住地の狭いワクを越えて、正しい戦いを闘おうと呼びかけた。「聖書と農耕」は信仰を確固たる

信念に育て、不徳を排除し、有益なたとえ話を載せて良き師の役を果たすものであった。南アメリカメノー派の代弁者としてその持つ意義は非常に広範囲に及び、一界の小部落ウィトマルスン（パラナ）がその発祥の地であり、唯一の例外の他は全てウィトマルスンの人が編集長を努め、ウィトマルスンの400年の歴史がその中に息づいている。「聖書と農耕」の名称は、我々信仰集団の根本本質を表し、我が創始者および後継者は、何如なる地方的愛国主義にも似ぬ独自の規範を礎として築いたのである。

「聖書と農耕」を購読する人達は南アメリカ全メノー派家庭は言うに及ばぬ。これからは「世界的同胞」の為にもまた他の新教宗派の人々との橋渡しの為にもこの雑誌が役立つ事を願っている。

創始者であると同時に最初の編集長も努めたDr.フリック・クリーヴァーは第1号に次の様な一文を載せている。

「（抄訳）『聖書と農耕』の名の示すとおり、我々には神の国を建設する為田畑を耕し、日々汗を流す。……『聖書と農耕』は、遠く離れたコロニー、群落、家々の為の機関誌として相互の理解と信頼を確め合う手段でなければならない。」

死、生涯の終幕、しかし業績は生き続ける。

1956年6月6日、Dr.フリッツ・クリーヴァーの突然の死により、南米メノー派共同体は第一級の闘士且先駆者を失った。我々は彼の死に何ら対抗するすべを知らなかった。彼がてこ入れした数多くの仕事は完成間近にして放り出された。クリーヴァーの遺族のみならず、学校、教員組合、文化協会、青年組合が孤児となってしまった。

その後「聖書と農耕」を引き継いだ人々は忠実にこの誌の使命を踏襲する事に努め、多大な個人的犠牲を惜しまず、地方編集局が設置され、絶ゆ間ぬ前進を続けている。

聖書を先頭に、鋤は歩み続ける

紙や印刷代、発送費用、交通条件の悪さ、コストと購読者数との不均衡などで、「聖書と農耕」の刊行は何度も危ぶまれた。

北米メノー派協会の好意で私達はライノタイプライターを使用する事ができた。また北米メノー派共同体総務委員会から資金の援助も受けた。

1966年1月1日から誌名を「ウンザー・プラット(郷土誌という意味)と変え、南米における公的機関誌となった。また「ウンザー・プラット」刊行を管理する為の南アメリカ出版委員会を設立した。

然しながら、この誌名変更の成果は期待したほどにも至らなかった為、皆の総意に基き、1968年4月1日以降、再び元の誌名「聖書と農耕」に戻すことになった。また、1966年には付録的に「子供の便り」や「青年書翰」が発刊され内容の充実を計った。

1971年、C.O.MおよびC.O.Eと略称される労働委員会において新しい方向づけが発表され、南米におけるドイツ語新聞を援助する用意が有ると述べ、種々の努力が払われたが結局成功に至らずに終わった。

これに習って、1972年6月クリチーバにおける第9M.W.Kに際して、南米メノー派唯一の機関誌について絶望的な予想が出され、「聖書と農耕」も当年度12月を似って援助打ち切りとなった。1972年12月号を最後に、幾多の努力と限りない希望を託して綴り上げたこの雑誌も歴史の幕を引くのか ……。

然しながら、購読者のアンケート調査では雑誌続刊の希望が圧倒的多数を占めた事から、1972年11月5日ブラジルメノー派教区会議が刊行を保証する事になった。広告欄、募金、寄付金によって経済的負担は緩和された。また専任の編集長の就任も予定されたが、予算上未だ実現されない。

これまで「聖書と農耕」の編集長として多くの良き協力者を得て本誌と苦楽を共にした人達の名を挙げよう。

Dr.フリッツ・クリーヴァー(1954年1月～1956年6月)、ユリウス・レギーン(1956年6月～1957年5月及び1959年2月～1964年12月)、ペーター・クラッセン(1957年6月～1959年1月及び1969年12月～1970年4月)、ゲルト・ウーヴェ・クリーウェ(1965年1月～1968年3月)、ブルーノ・エップ(1968年4月～1969年11月及び1970年5月～1972年7月)。アルフレ

ード・パウルス（1972年8月～）が現在担当している。

2年後は「聖書と農耕」も「銀婚式」を迎える。購読世帯は現在1,600家族程である。その存在意義も正当化されたものだが、これからも我誌を愛読支持して下さる方々の積極的な愛顧をお願いすると同時に、神の慈悲に感謝の意を表したい。

1976年8月　アルフレード・パウルス

(2)「回　想　記」

第2次世界大戦が終り、パラグアイで新しい生活を送るために戦争に生き残った若者達が南米へ帰ってきた。私は帰還兵と結婚した。メノー派コロニーは期待を持てそうな所ではない。小さな農場を手に入れる事も難しく、又、革命で世情は荒廃していた。メノー派教徒新聞に、パラナ州のクリチーバおよびバージェ周辺の新しい移住地の誕生の記事が載っているのを読んで、私達は大変迷った揚句の果て移住することにした。土地や財産を売り払った僅かの金を持って出発した。我々は幸いドイツ旅券を所持していた為、飛行機で国境を越える事ができた。クリチーバの駅から、ニューウィトマルスンの近くを通るというバスに乗り込む。運転手は我々が地理不案内でおまけに言葉がわからないので降りる場所に気を使ってくれた。しかし、バス料金が足りなかったので、中途の原野にトランクや夜具と一緒に降ろされてしまった。

重い足を引きずりながら、我々はデコボコした小径をニュー・ウィトマルスン目指して歩いた。途中道端で休んだり民家で足を留めたりしながらメノー派部落にたどり着いた。驚いた事に、私が子供の頃習い覚えた歌が聞こえてくるではないか。それはかってのパラグアイでの私の恩師が教える子供達の声であった。彼女は私達を心から歓迎してくれた。私は何と勇気づけられたことか。ドイツの諺の中に「歌のあるところに悪人は寄り付かない」というのがある。日曜日のミサではヤンセン師の暖かい話を聞き、故郷にいるときと変わらぬ気持であった。

鋤もまぐわも無しで耕さねばならなかった。一体全体畑をどこに作ればよいのか。住宅付の借農地が空いていたのですぐに利用する事にした。隣家から古

い駄馬を安く譲ってもらい何とか準備は整った。クリチーバでは乳牛を貸してくれる所があったので、6頭の乳牛を頭金払いで手に入れた。6頭のうち2頭の乳牛が一週間の後には死んでしまった。がっかりとした様子で夫は病院へ来て私に悲報を伝えた。私は、家で元気な後継ぎがいるからと慰める他にすべを知らなかった。勇気を失えば全てが失われる。鍬やスコップを手に小さな土地を耕作し、苺やスイカを売ったお金でブタを飼育した。毎朝5時に仕事は始まり、夜遅く終わるとぐったりと疲れて寝床に沈む。谷底の泉までバケツで10杯も20杯も水を汲みに行かねばならない。野性の馬を売って古い耕作機を買った。私の夫は誇らしげであった。トウモロコシ、米、小麦、ライ麦を収獲した。手に傷を負いながら刈取った物を夜は借りた機械で打穀する日々であったが2～3年後はコンバインを用いて収獲する事ができるようになった。

日曜日には老いた駄馬に肥やし車を引かせて「散歩」した。子供を膝の上に抱いて楽しい遠乗りに出ていると、ヤンセン翁が私達に向って叫んだ。「あと10年もすれば自動車でドライブできるじゃろう」。

神は私が想像した以上のものを与えられた。「岩野」に穀物が豊かに実り、「飢えの谷」は美味しい食事が供応される村となった。7年後には自動車を買い、23年経った今日、神の慈悲の深さに何と感謝してよいか分らない程恵まれた平和な暮らしをしている。

マルタ・エッブ

(3) 想　い　出

1952年12月10日は私にとって忘れられぬ日である。アスンシオンから飛行機でクルチーバについた私達を午後2時空港に迎えたのはアブラム・エンス氏である。彼は我々に車を提供してくれ、我々の荷物は貨物車で運んだ。彼の車でザキシムに到着し、叔母のアガタ・レギーンのお茶に招待された。

移住地指導者であるP・パウルス氏がレギーン家に訪れ、新しい移住地の学校長を心から歓迎した。

私達一家はパウルス氏の車でウィトマルスンに向けて出発した。クリチーバの街は、沢山の商品を並べた店が目につく賑やかな場所であった。ここから70

キロほど走るとウイトマルスンである。ここらあたりは、美しい景色に映え、笠状の樹冠が大空にグンと突き出ているのが印象深い。セラ山を登ると、道の右側の深い谷底に思わず胸がつまる。山を越えるとなだらかな丘が目の前に現れ、ウィトマルスン移住地へ到着した。迎えてくれたシスターが大変温かい方で信頼のできる人間であった事は私にとって非常な喜びであった。

私達を歓迎してくれたもう1人は伯父のヨハネス・ヤンセンである。息子は伯父の顔を覚えていて大層喜んだ。

シスター・マリーは私達を家へ案内して暖かくもてなしてくれた。熱いコーヒーが沸いており、私達はすっかり準備のできたテーブルに座るだけであった。今日、朝食をとった所はアスンシオンであったが、同じ夕方にはもう新しい故郷ウィトマルスンで食事をしているのは何と感慨深いことだろうか。

就寝前に近くの病院でシャワーを浴び旅の汚れを洗い流した。帰り道に娘のグートルーンが目ざとく路灯が無いのに気付いた。

激しい河音に喜びと悲しみを想いながら私達は寝入ったのである。

私の学校日記より

＜彼は耳が遠い＞

グラマドからティーセン氏が我校を訪問にやって来た。小学校の朝礼で訓話をしてもらおうと招待したのである。

ティーセン氏　「おはよう、皆さん」

子供達は小さな声で挨拶に答えただけであった。ティーセン氏は子供達と接触しようと努め、耳に両手をあててメガホンをつくり言った。「何か聞こえたかな？」そこで子供達は元気な声で「おはようございます」と応えた。

ティーセン氏は子供達をもっと引き立てようと三度目の挨拶をやらせた。これには子供達はもうあらん限りの大声をはり上げて応えざるを得なかった。

ティーセン氏の故郷はカナダであった。彼は礼拝活動に出かける前に、子供達がどのくらいカナダについて知っているか色々な質問をしていたが、子供達は何も答えられなかった。教師として恥じ入った次第である。

4時間目は2年生の音楽の時間であった。「みんなの中にはカナダに親戚のいる子が沢山いるでしょう。勿論、カナダのお話しができるね」。子供達

の話はこうである。「カナダは冬には雪が降って、子供達は雪ダルマをつくって遊びます。そこではお金はドルといいます　……」。「そうね。じゃ何故今日の朝叔父さんには何も話さなかったの？」

するとローランドが憤然として答えた。「叔父さんは耳が遠いもの。僕達お早うございますって3回も言わなければならなかったもの。」

＜論理の時間＞

パウルス先生は黒人のトム少年の話を語る。トムは白い皮膚にとてもあこがれていたので、「自分の顔を水と石けんで15分間余りもこすったんだが、一体どうなったんだろうか？」

7才になるエヴァルトが答える。「少年はすっかりくたびれてしまいました！」

＜作文の時間＞

初歩の作文練習。並べられている単語を用いて短文をつくらせる。「reimem」（韻をふむ）は少し難しい言葉かとためらわれたが、すぐに子供達は手を上げる。しかし、やはりどれも間違いだらけの答えでこちらがお手上げであった。

＜不　　満＞

アドルフが泣きながら先生の所へ走って来た。「皆は僕の名前を悪く呼ぶんです」

「そう？　一体何て呼ぶの？」

「皆、僕をいつもアドルフ・ヒットラーと言うんです。」

メリタ・ニッケル・ウィトマルスン

(4)　斯く始まりき

1930年1月16日、ハンブルク港を出航した船は、開拓者を乗せて一路ブラジルへ向った。それまでブラジルに足をおろしたメノー派信者が一人もいなかった事は考えざるを得ないことであった（パラグアイのチャコに入植したメノー派はいる。）。ブラジル移民第1陣を率いるのは、ハインリッヒマルティンスであった。間も無く、有能な実業家ハインリッヒ・H・レーヴェンの同行す

る第2陣もやってきた。

第1陣は、サンタ・カタリーナ州のクラウエル渓谷にあるハンザ植民会社の所有する山林原野を居住地とした。渓谷に居住し、運搬手段が確保されると新たな土地が見つけ出さねばならなかった。また別の移民は「シュトルツ・ブラトー」の開拓に乗り出したが、山脈地帯を選んだことは向こう見ずな行為でもあった。しかし、開拓民は恐れる事なく沢山の樹木を伐採し、土地を開墾し、種を蒔き、一時も早く収穫をと願いながら、来る日も来る日も意気揚々と働きに出かけたのである。苦しみはパラナ高原に新たな居住地を開くまで絶えることがなかった。短かい挿話としてほんの短い期間に起こったことについて述べれば、この居住地に多くの不穏な出来事が起こっている。

残念な事に、教会の分裂によって移住地もただではすまなかった。「お前が左へ行くならおれは右へ行く」、正確に言うならば「お前が北へ行くならおれはブラジルの広大な土地を南に行く」という言葉に表わされる様に、一方はパラナ高原に移住して「ヴィトマルスン」と称するようになり、他方はウルグアイ国境近くに、バージェ移住地を建設した。ここではブラジルのメノー派について新しいニュースは述べない。なぜなら苦労や困難はすべて個人的に克服してきたのであるから。

ブラジルにおけるこの様なメノー派の分裂は他の人には理解し難いであろう。苦悩の分裂にもめげず我々は危機を克服したのである。然し我々は今日ではもうこれ以上お互いにこの事についてむし返さないつもりでいる。むしろお互いに協調して働いているのだから。

開拓当初又はその後になって、開拓地の指導的役割を果たした人々を挙げるよう依頼されているので覚えている限り述べてみよう。

先に述べたハインリッヒ・マルティンスはブルーメノの教師のポストを得、移住地を去ってしまった。

既にロシアに得意先を持っている実業家H・H・レーヴェンも同様そそくさと引き上げた。長く移住地の指導者を勤めたのは、P．パウルス一世である。彼の卓越した手腕によりウィトマルスンはパラナに開花し、また官庁当局との意志疎通も容易になった。現在、彼は後輩にその任を譲ってはいるが、彼の子

息令嬢も父親の精神を受け継いで種々の方面で貢献している。

デビット・ニッケルの名も忘れる事はできない。私は彼やその他の指導者の誤った指導があった事についてとやかく言う気持は全くない。指導者に誤りはつきものであり、なによりも彼らは自己の信念に忠実であった事を確認したい。

名前を挙げるべき人々はまだ沢山いる。教会関係で私達の良き牧者となった人々となると私の手に余るほどである。

ペーター・クラッセン、カナダ

(5) ヤンセン小母さんの人生

ヤンセン小母さんはトルコ育ちで1906年ヨハネス・ハンセンと結ばれた。その経過がまた面白い。年若い教師だった彼がメノー派村に赴任して来たとき条件として結婚経験のある者となっていた為、未婚の彼はとり急ぎ結婚した由である。

「ロシアに迫害の嵐が吹きあれていた頃、私達はモスクワに向けて進んでいた。秘密警察（GPU）が夜中でも人々を連行して行った。ある夜私達もとがめられたが、年若い官憲に涙ながらに訴えて見逃してもらった。

ドイツでクリスマスを迎えた後、私達はブラジルへ渡る決意をした。移住当初、シュトルツブラトーでの生活は困難を極めた。娘達はブルーメノーで織工となり、夫は教師、説教師、画家として何とか暮してきた。

私は「ロッサ」（焼畑地）が気に入った。我家にカマドが無い頃は、切り株の間で豆を煮たものだ。

1952年パラナのウィトマルスンへ移り、夫は新しい移住地の最初の教師となった。

私は今年で89才になる。年はとってもまだ歯を持つことはできるが、生憎歯は取られてしまった。私は今は余生を一人静かに送りたい。」

ヤンセン婆さんはこう語った。部落最長老である彼女の生涯はウィトマルスンの波乱に満ちた歴史と切っても切れぬものがある。彼女はいつも決まってパルメイラの託児所に見舞品を届ける。

彼女の7人の子供は全員ウィトマルスン、クリチーバ、サンパウロに所帯を

持っている事は何という運命であろうか。夫ヨハネスは偉大な牧師として部落に祝福をもたらし、その貢献は久く賞め賛えられるであろう。

(6) ウィトマルスンの想い出

ウィトマルスンといえば海外を思い浮かべるが、元々この近くの地名をとって名付けられたのである。

1951年クリチーバにおける説教師会議に際し私はクラウェルを訪ねた。入植当初乳牛がこま切れで買われていた事を思い出す。頭、角、肢、尾。まともな乳牛を手に入れたのは随分後のことである。

移住地と関係を断ってからすでに20年経つ。当時の面影はほとんど姿を消し私は残された2つの形見を忘れる事ができない。雨衣と新しいドイツ語の聖書である。この聖書は今でも日常用いている。

フォレンダムからウィトマルスンまで当時(1953年)約3週間半ほど要した。日曜日朝4時半に到着すると我々は後に病院となる家に荷を降ろすや否や説教師達がやって来てさっそく説教を頼まれた。私はそこで誰も彼もが死にものぐるいの努力で働いている事を教えられた。全員が子孫の繁栄を願っての事だった。

最も愚かな農夫は最も肥えたイモを収獲すると昔から言われているのを真似て私達も耕作に加わった。私は教師も兼ね、週に30時間も教え、また説教も授け、余暇には自分の3人の子供の他に9人の身なし子を世話した。獣医の娘である妻は、乳しぼりの他、医術的処置も施すなど多大の労を為した。

この拙文を書きながら私は突然、前移住地指導者ペーター・パウルスから頂いた書翰を思い出した。彼は昔の事を懐しんでいた。

毎夜皆が寝静まった頃になると夜空を見上げて部落の3つの星として輝きを失わぬよう励し合った。彼と私、そして想像も出きぬ程重荷を背負って文字どおり我が同胞体の為に憤死したDr.フリッツ・クリーヴァー。人々は彼が疲労困憊しているにもかかわらず働くことを止めなかったその悲愴な意思を忘れる事はできない。

またユリウス・レギーンの名も私の頭から去ることはあるまい。彼は我が部

落の丘からよく見える通りに面して住み、デビッド・ニッケルの家からもさ程隔れていない所だ。我々はこの現状を正しく認識し、それに従い、歩みを共にしなければならないと話し合ったものである。組合の集会のときにはトラックの荷台に肩を並べ、クリチーバを往復した。我々はこれを「世界振興会議」などと呼んで笑ったが、心の底では悲しみがこみ上げた。

私はもう一度あの小さな小ぎれいな家の立つ山に登りたい。もう一度、あの落ちて窒息死しかかった小牛を助けた肥だめを見たいものだ。私はクリッツ・クリーヴァー・スクールの教壇にもう一度立ち、教会でイエズスの教えを説き再び、我家の前の墓地を墓参したい。私は皆さんと共に我々に与えられた祝福を感謝する。暗黒の生活から日の当る明るい生活を切り開く苦労と喜びをすこしでも経験する事ができた事は私の至福とする所である。

J．S．ボストマ、オランダ

(7) ウィトマルスンでの体験

ウィトマルスン！　この名はまるで音楽の様な響きを持つ。私が初めてウィトマルスンを訪れたのは1962年厳冬の折であった。私は誰も知人が居らず、ブラジルのドイツメノー派の千変万化の歴史も知らなかった為初めは余り関心なかった。

私は大きな眼で私を見つめる貧しい農民に出合った。勿論私は良い印象を受けなかったが、この顔のシワは激しい労働と彼等の苛酷な過去を物語るものだという事が分った。私は、彼等は自分の道に対し確信を持っているのだという事を感じ取った。

1964年、私は家族を連れて再度ウィトマルスンを訪問した。「聖書と農耕」「ディ・ブリエッケ」等々はゴシェンの図書館で目を通した。

今回訪問の目的は、メノー派社会の制度本質を研究し、博士論文のテーマにしょうという事である。

この頃（1964～65年）の思い出は特になつかしいものがある。私はフリッツ・クリーヴァ学校の当時の校長ペーター・パウルス2世のオフィスの屋根の上で記録書を閲読し、ウィトマルスンの人々の勤勉さと信念の強さに敬服せず

にはいられなかった。彼等に対し哲学、や神学、又社会学の質問をしながら、私は指導者ばかりでなく、一般の人々もブラジルの政治経済の問題について詳しく知っている事に気が付いた。

アメリカから来たメノー派信者として、ウィトマルスンの個々の家を訪問することを許されたのは、私にとって非常に幸いでした。それは一度だけの経験でした。私はさまざまな価値基準をもった人々に出会い、経済的水準ばかりでなく精神的な高さの種々様々に異る人間を知ることができた。

ウィトマルスンには三種の教区が対峙している。このいづれにも属さぬ人々は多勢いる。私は多くの信心深い人々に会ってきた。ほとんどは共同体に属しているが、必ずしもメンバーとして活動していない、神を信じぬ様な人もいる。共同体生活を促進するグループもあれば、それとは縁の無い生活形態のグループも存在する。ウィトマルスンの人々は働き者であり、外来者に好意的である。

ウィトマルスンでの調査から彼等の識見、そして独自の価値感、仕事に対する献身さに私は驚きの念と共に深く感動するものがあった。非メノー派の人々に移住してきたメノー派集団についてたずねると、メノー派の優れた働きを認め高く評価していた。

ウィトマルスンでは勤勉と労働の規律の結果が私の気をひいた。そのなによりのあかしは、ファゼンダ・カンスラがウィトマルスンに譲渡された事であろう。

このファゼンダはかって名家の所有に帰し、貧しい農民が働き口を得ていた。しかし、現在ウィトマルスンでは、そこに住む多くの人々に楽しく、満ち足りた健全な生活条件と、働き場所を与える大農園に変貌している。

メノー派の人々が原野を人工の牧草地に作り変えた事は事実である。私はコロニーに乗り入れる毎に、牧草やソバ畑の見事さに胸が打たれるのである。家並と並木、良く整備された街路と高圧線の鉄柱で景観は一新した。これは人間が働かなくて起った奇跡ではなく、神に仕え、大地を征服した一つの宗教、集団のなした奇跡である。

それは家族の者の成果である。彼らは日夜働き合理的な農業経営方法で耕作した。彼等の合理的な農業経営方法はロシアのステップ地方には全く無い種

類である。その様式と方法は、共同体、移住地、協同組合に管理され、彼等は状況に正しく順応しながら様々な事を処理してきた。失敗や問題があったが、25年間の歴史をふり返ると、共同体としての生活、経済、教育、社会福祉の成果が指導者の方針の正しさを証明している。

1964年に私がウィトマルスンの家庭と歴史を知った時に最初の印象を得た、ウィトマルスンの歴史は愛と平和の支配した歴史であり、決してファンタジーなどとは結びつかぬものである。

しかし、始めの15年間、コロニーが困難、対立そして不運という重荷を背負ってきたのは明らかである。多くの意見の違いと論争があった。社会的、文化的、経済的及び宗教的変遷は避けられない。権威主義的共同体志向から民主的私的、個人的体制への移行が行われた。特に経済的な方面でのチームワークが顕著であった。

ウィトマルスンは、国や世界の経済的、政治的、宗教的変化に僅かながらだが影響を受けている。農薬の機械化などは最も良い例で、経済的には協同組合学校制度にもその影響がみられる。

これらの分野でウィトマルスンはブラジルの手本である。一般の人々に将来のために計画をたてるできごとを示している。農民はトラクターで耕地を耕し車を駆る。彼らは堅牢な家屋に生活し、冷蔵庫とテレビが欠かせない。

子供達はフルートやヴァイオリンを弾き、古典音楽を愛する。

もう一度ここで、何如に農民のこの小さな共同体の土地を耕す上での一致団結した経済的な協力が生んだ成果が大きなものであるか確認しておく事は無駄ではあるまい。ウィトマルスンが全ブラジルにとりモデルとなることは望ましいことであり、意味があるであろう。

12年以上も前、このウィトマルスンについて論文を書いていた頃、私は家族を連れて何度もコロニーへドライブした。ウィトマルスンは素晴らしい。「私達はシオンの街へ巡礼する　……」という美しいメロディが常も思い浮かぶ。いつかウィトマルスンに土地を買い、のどかな暮らしをしたいと夢みた。

この荒地の開拓には適切な目的設定と正しい計画の他に労働に対する勇気が不可欠である。彼らはどんな労働をもいとわなかった。正直で敬虔な彼等だか

らこそ、神は経済的興隆を与えられたのだ。私は物質的成功の次には信仰的生活の開花する事を確信する。

ウィトマルスンの人々が、神と郷土を愛しますように。

「聖書と農耕」はこれに対し都合の良いシンボルである。教会、ホーム、学校、そしてすべてのウィトマルスンの人々の心の中で神よ栄光あれ、神よ私にもう一度すばらしいあのウィトマルスンと再会する機会を与えて下さい。

ハーバート・ミニック、USA

(8) ある開拓者は語る

「この絆の強い共同体無しに私達一家のパラナのウィトマルスンでの生活は考えられない。私は工員で、とてもコロニーに土地を買うお金など持ち合わせていなかったが、組合の好意で私の様な無力な者もパラナに転入することができた。」

こう語るのは第3村のニコライ・ペナー氏である。何故移住したかという質問に対して「パラナでは我々の独自の学校を建てる事が計画されていた。私は子供達をギムナジウムまで送り、クリチーバの上級学校に進んだ子供もいる。

第2に、ここなら自分の土地を手に入れて乳業を営むチャンスがあること。まず7頭の乳牛で始めたのが今では70頭に増えている。最初の2～3年は、よその家へ行って生活費を補わなければならなかった。

当初は非常につらく、開拓のための労働は骨を折ることを要した。それは生きる為の闘いであった。集団労働により、道路を建設した。雨の為、泥沼になって通れないことも度々であった。乳業場、組合、学校などすべて自分達で建設し、経費を自已負担し管理していかねばならない。交通輸送の問題は大きな悩みの種であった。当時は馬車を使って運んだ。現在は車で遠距離といえどもだれも不平を言わない。

ペナー家の家計は著るしく好転した。初めは家畜の病気で停滞したが、米の収獲に恵まれたのが幸いした。これによって一度に土地の代金を払う事ができた。それは実に大きな成果であった。やせた土地に収獲を得る為の汗と努力は測り知れないものがある。

農園には馬車に代って2台のフォルクス・ワーゲンが並ぶ。農業の機械化に努め、今では農場を2ケ所持ち、立派な家、現代的設備の整った牛小屋がある。すべては、確かな生活状況により結論づけられる。25年前と今日の差のいかに大きいことか。すべてに安定した生活を感じとる事ができる。

ニコライ・ペナー

(9) ブラジル－私の第2の故郷

第2次世界大戦の終末に伴ない、ドイツへ帰郷しようとするパラグアイのメノー派信者の望みは消えた。そして何処かに郷土を建設する手だては無いかと方々捜し回ったが、カナダはごく一部の特権者の入植しか許可されておらず、人々は南米の別の国、例えばアルゼンチン、ウルグアイにひかれた。アルゼンチンのブエノスアイレスは大規模な工業化が実施され仕事の機会もあった他、メノー派家族が先住している利点を得て一部の移民はそこに移住したのである。然しながら、ブエノスアイレスの広大さの為、メノー派グループは散在的に居を構えねばならず共同体生活には不適であった。そしてカナダや西ドイツへの道が開かれると多くは転住して行った。

私もカナダへの入国許可証を受け取る為、アスンシオンへ行ったところ、チャコから来た友人に出会った。彼はパラナ州のウィトマルスンの新しい移住地の話しを持ちかけてきた。丁度私の兄弟のフリッツ（Dr.クリーヴァー）がウィトマルスンにおいて学校制度の確立を引受けていた事から、私は急いでクリチーバへ飛び、ウィトマルスンに私をはじめ他の家族が居住する事が可能かどうか確認をとった。

移住民の第1陣は、既にこの地に渡って来ていたが、大部分はクラウェルの農地の跡片付けに手間がかかったようである。

私は周辺を駆けながら、この地勢や地質などを見て回った。不利な要素は例えば、傾斜の角度が強いこと、岩壁にさえぎられていること、大規模農業に適さぬこと、土地がやせており、肥料を沢山与えなければ作物が実らない程であること。

他方、この地の気候や風景は私の気に入った。その上、クリチーバは良い販

売市場でもあり、ウィトマルスンから道路も比較的よく開けており将来性があった。特定の産物（例えば乳製品）を生産すればウィトマルスンの未来は明るい、など私は色々に想像を繰り返し、ブラジル、ウィトマルスン行の計画が徐々に熟した。こうしてパラグアイメノー派のブラジル移動が始ったのである。

第4村に空いていた土地を我々の故郷とした。僅かばかりの手持の金でここに農園を建設し、生活の基礎を築かなければならない。家族の生計維持の為、各々何頭かの乳牛を信用貸りで購入したが、その返済の為、苦しい仕事が続いた。特に6 kmも離れた中央市場に毎日どんな悪天候のときでも、必ず納入することは困難を極めた。運搬は各家庭の持ち回りとした。雨量が多いときは道路が使えなくなる為、これの管理にも多大の労苦が費されねばならなかった。

子供達の通学も大変な状況であった。中央広場に建つ唯一の学校まで6～7 kmの道を歩いて登校しなければならない。冬はまだ暗いうちに起きて家を出る。途中に2本の小川が流れていて、靴や靴下を脱いで零下何度という冷い水を渡って登校するのである。

自分の入植地の建設と並行して、共同農場の建設、学校の設置、部落全体の問題の討議や協調の為の話し合いも移住地建設の一部である。

今日、改良されたオランダ乳牛や、大豆、米、トウモロコシの大量収穫による定常収入を得ている。

フランツ・クリーヴァー

(10) 調　査　旅　行

ファゼンダ、カンスラの購入が決まった折、色々な噂が飛びかい、あの土地は使いものにならんとか、軍隊の練兵場計画がある所であるとか、果ては50cm～75cmの土層の下は岩石である等々……。そこでペーター・パウルス一世アブラム・エンス、デビッド・クープの3人が調査に出る事になった。

我々はまずファゼンダの管理者にこれまで何か栽培した事があるかと尋ねた。トウモロコシや野菜を少しとの返事である。我々は実際に菜園を見て回り、肥料の与え方が足りないが土地は悪くない事が分った。

次に土壌の深さを調べた。確かに石の多い所ではある。岩の立つ所も少くな

い。我々は証しに岩から5m掘り起してみたところ土嬢の深さは50cmあった。10m掘ると75cmとなり15mでは1～1.5mはあった。要するに岩は上方が広くなっているのだ。我々はまた3ケ所で泉を掘ったがどれも2mで水がわいた。我々は1日中ファゼンダを隅から隅まで馬で調べたが、現在の第2村に当る所に小さな沼地を見つけたにすぎない。

デビッド・クーブ

(11) ウイトマルスンにおける8年間の教師生活

「フリッツ・クリーヴァー・スクール」の外観は細長い建物で中には沢山の教室や事務室、出入口が多く有り、堂々として美しい。

現在300人の生徒が学び、生きる事の意味を悟り、人生の開眼の基礎が施されている。指導するのは約20人の教師である。

左翼は4クラスのギムナジウム、右翼は国民学校である。予備学校及び幼稚園は木造建設で河の近くに建てられている。子供達は毎朝乗合いバスやステーションワゴンで近隣の村落から登校して来る。二輪の荷車を馬に引かせて来る子供もいて、人里離れた所に住む4人の兄弟姉妹は3時間もかけてやって来る。

教師は自家用車で通勤している。近隣に住む者だけが徒歩で通っている。残念ながら移住地内の道路は車用で歩行者用の道というのはない。教師と生徒の大半はドイツ語を話すウィトマルスン人であるが、教師には隣町のパルメイラ、又クリチーバ出身の者もいる。労働者家族の受入れ数が年々増加している折、ポルトガル語しか分からぬ生徒が増えている。

授業の正式用語はポルトガル語であり、ギムナジウムでは外国語としてドイツ語と英語を学ぶ。国民学校はドイツ語授業を多く行い、幼稚園ではさらに多い。この結果、2ケ国語を使用することで移住地と学校では幾つかの問題点が生じている。すなわち、

1. ドイツ語を話す生徒とポルトガル語しか話さぬ生徒の年令の差のある混成クラスの授業は実際上不可能であり、かつ教育的観点から許されない。
2. 能力の低い子供は初等教育を2ケ国語でこなす事はできない。
3. ドイツ語とポルトガル語は共通した点が少く、異る点が多い。母音の発音、正書法、教授法は一致しない。
4. ポルトガル語はドイツ語より易しく、すべての生徒によって優先される。

ドイツ語に困難を感じるのは子供ばかりでなく両親にも多くみられる。

ブラジルメノー派の国語問題は複雑である。どの言語が一体通用しているのか。彼等は多く方言である低地ドイツ語を話す。方言、ポルトガル語、標準語が多様に入り混じっているのが現状である。

学校ではポルトガル語とドイツ語両方の修得が義務づけられている。子供達

は上に挙げた3つの言葉を理解するが、正しい修得にはほど遠い。生徒・教師双方が多大な努力を払っても初歩の域を出ない。子供達は感覚的にこれらの言葉を使い分けることができるが、正しい体系的言語の修得の為の素養に欠けている。また良いドイツ語を耳にする機会に恵まれていない事も不利な要因である。これに反し、ポルトガル語の能力の不均衡さは、学習につれて平均化され得る。子供達にはまず、ドイツ語の構造に対する感覚を教授しなければならない。加えて耳と舌の練習を行う。もしこの両器官の言語感覚が養われば、言語の修得の道は大きく開かれるのである。

2ケ国語をマスターする事の価値を子供達が成長してから理解するだろう。学校は決してスペシャリストを養成する所ではない。学校は若者に自己を磨くことを可能にする武器を授ける。生徒は自己形成の為に必要な知識を蓄積しなければならない。可能な限り幅広い基礎知識を身につけることが必要である。人は一生学び続けねばならない。今日の世界では、「学び尽くした。」 とも「完成した」と豪語しうる者は存在しない。

新しい事を学ぼうという姿勢の者だけが自らの進路を切り拓くであろうし、2ケ国語を話すという能力は人生においても多くの機会を与えてくれ、すべてのブラジルの若者にとって価値ある財産である。ドイツ語の教師は生徒が進んで学ぼうとせず限られた学習時間しかさけないことにがっかりする。しかし多くの結果として肯定的な面が表われている。子どもたちはドイツ語に取り組むことで絶えず刺激を受けている。彼らはドイツ語を聞きおのずから話すようになる。彼らはドイツ語を読み書くことを学び、その過程で豊富なドイツ語の書籍に接する。我々は子供たちにできるだけドイツ語を話し、読み、歌い、祈りそしてその結果彼らが物事を十分に考えそして真実と正義のために恐れることなく忠実に取り組むことを知ってもらいたい。

アンナ・バルツァー

(12) AMAS ― ブラジルメノー派教区の支援活動

我がブラジルメノー派の最初の4分の1世紀に及ぶ歴史において、ブラジル土着の住民の布教活動に関する限り我々は沈黙していた。それはひとつには言

葉の障碍があり、また1930年代にロシア難民として南ブラジルの原生林において自分達の生存闘争を繰り拡げねばならなかった事情がある。しかしながら、その様な中でも、メノー派の病院は当初から全ての人に対して開かれていた事を強調せねばなるまい。

ブラジル人に対する宣教活動が我教区で盛んになったのは50年代に入ってからである。メノー派教区およびメノー派同胞教区は若い世代を中心として、住民の布教活動に入って行った。また文盲を教育するミッションスクールもここかしこに建設された。ウィトマルスンでは「仔牛運動」が開始され、子供を沢山持ちながら満足に食べさせてやれない家庭に乳牛の仔牛を寄付する為の慈善募金である。

ブラジルにおけるメノー派布教活動は常に社会福祉活動の性格を有するものであり、学校・医療サービス等が現実的な救済活動が、北ブラジルのボランティア活動と同様に行なわれた。

1960年アマゾン川河口から500 km南にあるマラニオンの熱帯原生林の中において、ブラジル新教教会連合による植民計画「グルノビ」が開始された折には、ヤコブ・エッブ夫妻がはるばる4,000 kmの途を渡って製材工場の建設奉仕を行った。その後我が移住地から多くのボランティアが赴き豊かな知識と能力を生かしてブラジリアのかの居住地建設に尽力したのである。

ア．AMASの設立とその意義

ウィトマルスン・メノー派教区は30 km離れたパルメイラに教区を設け、社会問題特に野放しにされている孤児問題に力を注いだ。1970年この様な子供達の為に家を借り世話する事に着手した。同年9月パルメイラにAMAS（メノー派社会奉仕協会）が設立され、当初はその活動範囲を限定していたが、AMASの目的は広範囲に及ぶものであった。

1. パルメイラにおける貧困破滅家庭の子供を保護する施設を維持・運営する
2. 貧困家庭の救助及び救急奉仕要員の派遣
3. 結婚講座、栄養指導、家事・裁縫・育児等々の教育

4. 災害救助活動、アマゾナス地方及び北東ブラジルにおけるボランティア計画

5. パルメイラにおける職業学校の設立。

AMASはボランティアの自己負担を基本とする。1972年メノー派パラナ地方会議がAMASの目的に賛同を表明して責任を引き受ける事になり、執行部を選出してAMASプログラムを実行管理する事になった。

6年前、この支援活動に着手した時はまだ誰も考えも及ばない事であったが、1976年には150人もの園児を立派な設備の整った自分の建物で保育する事ができるようになった。

この種の活動を全くゼロから始めて育てていく為には幾つかの前提条件が必要である。

a．ー神の賛意を得ること。

b．ー活動の為、犠牲を惜しまぬ友人を得ること。

c．ーボランティアや宣教団を得ること。

d．ー窮乏する人々に救助の手を差しのべる必要性を認識した教区を得ること。

e．ーAMASの為に祈りを！

イ．IMOとの連帯奉仕

1972年クリチーバにおける第9回メノー派世界会議においてヨーロッパ各国の我が同胞達はブラジルメノー派教区の奉仕計画に関心を表明した。その結果、ドイツ及びオランダ同胞の参加を得てIMOとAMASの間に良い協力関係が生まれた。IMOはクリチーバのメノー派同胞教区による職業学校設立を援助するなどAMAS計画の多くに積極的に協力している。最近ではアラグアセマにおける里親運動に力が注がれている。

IMOの物質的援助に助けられ、AMAS単独ではとても為し得ないほどの多くの強力なプロジェクトが実行されてきた。とりわけ、1975年12月以来エスター・ゲルバーやベロニカ・ハベガー両名がIMOボランティアとしてパルメイラにおけるAMAS奉仕に当ってくれている事は有難いことである。

ウ．AMAS活動報告

ツバロン — 1974年、海岸線の町ツバロンが大洪水にみまわれた時には、多くの義援金が徴募され、いち早く人々の救済に当った。いくつかの救援隊がツバロンに向い、家屋の建築を行い被災民の復旧活動に貢献した。

エ．MCCとの共同奉仕（ブラジル北東部のボランティア活動）

1974年、AMASから3人のボランティアが北東部の貧困地域に派遣され、MCC－メノー派中央委員会と共同の仕事に従事した。

すなわち、個人の適性および職業に合った方法によって彼等は大人や子供達の手助けを行った。そのひとつに小学校教師の為の集中講座が挙げられ、新しい授業方法および教育について示唆を与えている。1977年度は約200名の小学校教諭を対象とした講座を予定している。この他、子供の指導及び孤児ホームで教理の勉強を教えたり、手作業の指導に奉じた者もいる。婦人相談室では保健衛生、栄養講習、育児方法などの指導を行い、多くの家事に関る示唆が及ぼされた。休日聖書学校もボランティアの活動計画の一環である。

アラグアセーマは、アラグアイア川沿いの小さな町である。この川の源は数千キロ逆上ったアマゾナス原生林に発し、河口は世界一のアマゾン川に通ずる。ここに旧メノー派の布教活動によりメノー・シモンズ・スクール及び病院が生み出されたのである。アラグアセーマの周辺には幾つかの小教区が作られ、この地域の200余名の子供達の教育の為、IMOと合同で作業が進められた。特に、里親計画の実行に合わせて、栄養の改善、被服の給付、教育の向上が計られ、当地の教師2人は夫妻であったが、両名共各々教師、説教師および宣教師を兼ねていた。

オ．AMASの将来

1976年度におけるAMAS計画参加者数は27人である。パルメイラにおける託児所活動からアラグアセーマでの教育活動まで全てを運営する為には多大な金を必要とする。しかしそれは問題ではない。最も大切な事は、このような苦労の多い奉仕の仕事に、宣教師として、教師として、看護婦、農民等

々として自ら神のお召しに答え従う人々がいるという事である。最近公表された統計に依ると、現在ブラジルには1,000万人近くの保護・養育の必要な子供及び未成年がいるといわれる。AMASがこの様な中で実施してきた事は全く焼け石に水かもしれない。しかし我々は、キリスト者として、病める魂と身体の救済の義務を目ざしている。我々は狭い所に閉じこもって自己満足に陥ってはならない。キリスト者は常にイエズス・キリストの言われたように、「地上の塩」とならねばならない。

AMAS ― その今後はどのような姿になるであろうか。これはあくまで信仰問題である。我々は神の導く所に行き、人々に救いと愛の手をさし述べるのである。

ペーター・パウルス・ジュニア

(13) ハマーシュタインからパラナ州のウィトマルスンまでの歩みをふり返って

我々の医療活動は、1930年9月30日、第2次難民輸送であったユードクーニンからハマーシュタイン運行途中に始まる。

我々は、重病人、栄養失調の者、熱にうなされる子供を抱えていた。

ハマーシュタインで小児患者は隔離され病棟に収容された。病人の数は増えるばかりであった。子供を預けるのを拒む親に対して、一体誰が非難できようか……。しかし多くは致命的経過をたどったのである。死亡鑑定書には大抵「栄養失調及び腐敗性はしか」と記されていた。

ロシアでの苦労とモスクア政府の迫害によって、また官憲によって別れ別れにされ、残留しなければならない者もいて、眠れぬ夜に疲労困憊のあまり死に至った親もいた。

多大な努力と実験室での研究そして医者の技術により、さしもの伝染病も沈静した。今はその当時のベルリン政府の派遣した多くの医療関係者の果した働きを銘記しておきたい。

難民の健康診断の結果、手当てを受けていない多くのトラコーマ患者が発見され、カナダ政府は入国ビサの発給を拒否した。この為メノー派の施設が設けられ、長期間にわたる治療が必要になった。この時にベルリン大学教授Dr. ク

リマックマン及び講師Dr. ロールシュナイダーに非常にお世話になった事を特筆しておきたい。ひとつの面白い事実を紹介しよう。一人の老メノー派信者がロシアからドイツへ「エジプト眼疾」と呼ばれる病気を持ち込んだが、彼は前世紀プロシヤからロシアへ移民した折この疾患に罹病していたのである。今度はそれを持ち帰ったわけである。

メノー派難民の大部分は、親戚の住むカナダへ移住を希望した。ハマーシュタインのキャンプ村には約6,000人の難民が収容されていたが、その内4,500人はメノー派信者であった。この収容所が閉鎖されると難民はラウェンブルクのメレンに移送された。

フランスへ移住する計画は倒れた。ドイツの政情不安に禍いし帝国警視総監シュトユックレンは収容所の閉鎖を急いだが、ウンルー教授はその引き延ばしに成功した。

人々はカナダ政府が移民法を改正し、入国許可を与えることを固く信じていた。この間ロシアからの難民は増加した。またロシア政府はロシアに残った家族をドイツへ呼び戻す許可を与えた。中には一人で10人もの家族を呼び戻した者もあり難民の数はふくれ上った。MCCはパラグアイへ入植を希望する者を引き受けた。彼等の大部分はカナダ入国を拒否された者であった。

カナダに行く事ができず、またパラグアイに渡る事を希望しない者に対して、ドイツ政府はブラジルの入国許可を得る事を奨めた。ブラジル政府高官によるブラジル誘致の為の講演会が催され、美しいブラジルの風景の映画も上映された。リオ・グランデ・ド・スール、サンタ・カタリーナ、サン・パウロ、リオおよびエスピリト・サントなど。然しながら多くの親戚が幸福な生活を営むカナダよりブラジルの将来性に期待をかけるというメノー派は少なかった。ブラジルに渡った多くの者は、カナダの親戚がいつか入国の途を開いてくれるだろうと秘かに期待していたのであった。

ア、ラウレンブルク・メレン

ムンタウの看護婦であった私の妻マンヤ・バルテルと私は、メレンでのメノー派ホーム建設まで、難民村で医療奉仕を続けていた。我々はロシアにお

ける革命の嵐、モスクワでの非常時、すべて神の助けによって生きのびて来た。赤門を抜け、国境越えの為の健康診断を終えたとき、私達は神を称え感謝の歌を歌う事を忘れなかった。ロシアでの仕事を追われ一体私達2人はこれからどうするべきか。答えはすでに明白であった。ここに私達の同胞がいる。この同胞達によって私達の将来は決まるのだ。

1934年5月娘のギーゼラ・エディスがハンブルクで生まれた。当時、私はハンブルグ熱帯研究所で南米での仕事の準備に取り組んでいた。妻はメノー派ホームで移住まで看護婦として働いていた。

ブラジル勧誘の申出が幾度となく届き、原生林の開拓作業の為、もっと多くの人手が必要である事、現下の少い収入では生存基盤さえ安定できないと訴えていた。1934年ブラジルからメノー派ホームを訪ねた一行は、シマトルツブラトー部落が解体し、ウィトマルスンでは転出する者の数が日増に増えていると述べ、出来る限り早急に来る様に求めた。

カナダに住む私達の親戚の招待もあり、またパラグアイのチャコからも求めがあった。しかし、私達はキリスト者の義務感から「窮状にいる同胞」を救うべく、カナダを放棄しブラジル行きを決心したのである。

メノー派ホームは移住者が続々と出て行った為ほとんど住む者がいなくなり、1935年9月には閉鎖された。残された病人や老人はアルトナの福祉施設に預けることができた。

1935年9月20日、私達はハンブルグから「モンテ・サルミャント」号に乗り出航した。この時、教授ウンルー、牧師ショヴアルター、作家エルンスト・ベーレンス等が同行していた。1935年10月9日、18日間の航海の後ようやくリオに、2日後にはサンフランシスコ・ド・スール港に到着した。税関検査で3日間も滞留しなければならなかった。サンフランシスコ在駐ドイツ領事Dr. クナッペの仲介により結局は万事オーケーとなった。我々一行は熱帯の悪天候に何度か道を遮まれながらもブルーメナウ、ニュー・ブレスラウを経て10月17日午後5時ようやくウィトマルスンに到着した。

私達は木造建ての農家を買い、これを病院とした。階下の4室のうち、2室を病室とし、広間を薬局と外来診療室に当て、待合室は屋外のベランダで

ある。残る一つの部屋は食堂としたが、屢々産室に使われた。2階の屋根裏部屋には私達夫妻と娘達の寝室を設けた。

入植初めの頃、多くの友人に招待され食事の席で、ウィトマルスンやシュトルツブラトーの経過について各人の立場を詳しく説明してもらった。

患者第1号は、手の傷が化膿した使用人であった。ジャングルの奥深く往診を頼まれた老婆は出血が多くひどい貧血であった。村に医者がおらず、癌の危険が大きいと言われて来た彼女は治療を続けた結果回復し、80余の齢を重ねたのである。

ある日、原地住民の言葉をこなし原地人とも親しくしている一人のメノー派教徒が訪ねて来て、ジャングルを徘徊していた途中に貧しい老人が重い病に伏しているのを見かけたと教えてくれた。私は馬にまたがり危険な山道をかきわけながら奥深く入った。雨に濡れた枝が顔を打ち涙を流しながら曲がりくねった急な林道を越えねばならなかった。年老いたその患者の状態は悲惨なもので、重症の癌であった。残念ながら私にはもはや彼を救う事はできなかった。山を降りる事は登る事より難しい。しかし私は往診にやって来た喜びを感じた。

開拓農民達の意欲は旺盛であった。しかし彼等の道具は鍬と斧だけであった。仕事の収穫高は最低限度であった。原生林の豊富な樹木を伐採し、マンジョカを澱粉に加工する為には機械化を行わなければならない。また、ササフラスの木から油を抽出する工場を設置する事も良い収入源となる。村には発電所も必要であった。

然し人々は医療に特に関心を寄せていたのは、隣町ハモニアの病院がウィトマルスンから70kmもの遠距離にあった為ばかりではない。

当時ウィトマルスンはかなり流動的であり、クリチーバに移転する者も出てきた。ロシアと同様な広い小麦畑の耕作地に移ろうとする者もあったが、彼等は第2次大戦後、希望どおりに南ブラジル、パージェに近い小麦地帯に入植した。残った者は移住地の工業化が不可欠である事を確認し、勇気を振い越こして澱粉工場の建設にとりかかった。

オランダ同胞の方々は当初からよく病院の建設に協力して下さった。現金

の援助も受けてようやく病院棟の完成となった。

転任の動きも大部おさまり始めた。

移住地に発電所が設けられ燈が点るようになった。待望の澱粉工場も完成した。部落指導者デビッド・ニッケルの指導の下、ジードルングは息を吹き返し上向き傾向になった。

第2次大戦中、ササフラス油の価値が再び高まるに及んで輸出が増え、続々と新工場が建設された。私は僅かな実験を繰り返した後ササフラス油を製造する小工場を建てる事に成功した。原住民は使用できないササフラス木を工場に売却したのである。

私は定期的にシュトルツブラトーに残留した人々を検眼したが、川に沿っての往復に丸2日も要した。病院の恩恵を受けた者は、部落周辺の原住民にも及び、彼等はメノー派教徒と同様に優待を享受したのである。私達は、何度、「神が貴方達を祝福しますように」との言葉を別れのときに聞いただろうか。

流行性疾患の処置はいつも問題になった。チフス、アメーバ赤痢の一時的流行、またライ病、天然痘、耳下腺炎なども時々発生する。

私達がサンタ・カナリーナに着いた当時の部落の経済状態は、とても病院の設置などできない程に窮していた。要員の雇用はおろか、病院の維持さえも出来ない。特に悲惨な状態に耐えていた母親、栄養不足の者、貧血患者、小児患者の実態は私達の心をとらえて離さなかった。町で仕事を得ることのできない男達は生計を得る為「集団作業」に従事し、他方若い女性は、町で事務職などに就き幾らかの収入を得た。然し、病院を維持しようとする人々の固い意志は揺らがなかった。個人的な話ではあるが、私は月40マルク程度の補償が約された。妻と母は病人の為の食事の補給に東奔西走した。当時非常事態令が発令され、病人養護の為の出捐の制限措置がとられ、「バターを使用しないこと。食卓に供するバターさえ不足している」と言われていた。看護婦も一人しかやとえない為産婆を兼ねてもらった。ムンタウの病院の標語は「奉仕する」であったが、私の妻はムンタウで5年間奉仕した後、途中短期間の中断があったが1969年まで41年間看護婦を勤めた。

ドイツにおけるキャンプ中は勿論のこと、サンタ・カタリーナ及びパラナにおいても常に共に道を歩んできた母が逝去した時の私の苦痛は筆舌に尽くし難い。困難に打ちひしがれそうになると私は屢々ゲーテの「竪琴弾き」を思い浮かべたのである。「涙流して自らの糧を口にした事がない者、自分の床の中で涙に咽びながら胸苦しい夜を明かしたことのない者は天上に居ます偉大な方を見ることがない。」

ここ数年の間事情は全く変わってきた。以前は出生数が非常に高く、8～10人の子供を持つ家族も少くなかった。今日では都市や村落でも生活水準が向上し、子供の多い家庭は減少した。若者は新しい価値を求め母国語のドイツ語より土地の言葉をマスターしてしまっている者もいる。都市に出て働く者、大学に進む者、軍隊に入る者文化面での活動と職業の範囲も広がり、文化水準の向上と共に交際範囲が広がり、ラジオ・テレビの娯楽設備も普及し、その変化は私達の気付かぬ所にまで及んでいる。結婚の相手を職場や土地に住む人間に求める者もいる。ブラジルの最近3～4年を振り返ってみると、時代が急速に過ぎて行くのがわかる。

全く異った価値・規範が特に都市の大学やビジネスの世界で受け入れられている。

当初農業は非常に困難であった。特にたくさん子どものいる家族かそれに該当した。親は子どもたちのために難問を解決できると思っていた。親たちは子どもに良い教育をほどこすことに全力を傾けた。我々は今日ウィトマルスンに8クラスのりっぱな学校を持っている。卒業生は容易に中等学校、職業学校および主要都市の大学につながっている。若者の一部はこの道を進み、大学卒業後都市にとどまる。

再び昔の話に戻すが、1938年ドイツ帝国は難民の移民費用を査定する為南米へベンダー教授を派遣したのである。私達はドイツが旅行費用を逐一徴収するとは思ってもいなかった。この時の一世帯当りの負債は約1,700マルクであった。

イ．戦　時　中

1939年夏、第2次世界大戦が勃発した当時のこと、私はUSA　から同胞のオリ・ミュラーとDr. ジョン・シュミットをクリチーバのホテルで出迎えてた。この頃、我々は全くこの先どうなるのか予想もつかなかった。すべてはブラジル次第であった。というのもブラジルはいまだ戦争に参加していなかったから、我々もまた後には巻きぞえをくった。

やがてドイツ語の使用禁止令が発令され、私立独語学校は閉鎖された。我々は兵営に収容され、そこでポルトガル語を学んだ。多くの外国人、特に知識階級の人々の監禁が始った。私も警察に出頭を命じられたが、当局は我々の仕事を一種の社会奉仕と見做し別段事無きを得た。この際、同じ郡に住む現地生まれの医師及びカトリック神父フランツの御厚意を賜った。戦中は方々の病院に勤める機会を得、Dr. カルバーリョやDr. ペイゾートの休暇中にニュー・ブレスラウの新築病院の院長代理を勤め、ハモニアの大ドイツ病院のDr. クレーナーの代役も務めた。彼の後任は軍医であったが、よく私に協力してくれた。

戦後、移住地復興の為多くの努力が払われたにもかかわらず分離を余儀なくされた。戦争中には苦労をしたが、平和になって各人が自分の道を選んだ一部の者はリオ・グランデ・ド・スールのバージェへ出発した（1949／1950）。

他方、パラナへ移住する事に決意した人々は、ファゼンダ・カンスラの買収契約の締結が成功すると、全ての財を売却して移動を開始した。私は、未だ家財・土地を売却できずにサンタ・カタリーナに留っている人々と新たにパラナへ入植した人々との間を往復しなければならなかった。夕方ともなれば残された農家の大円卓をとり囲みながら話し合った。ある農夫はブタを売りたいが買上げ業者が居ないなど難題が山積であった。

この様なとき、クリチーバに農場を2ケ所所有するアブラム・エンスは方々に口を聞いてくれるなど大変に協力してくれた。

部落指導者ペーター・パウルス一世及び他の関係者達がウィトマルスンから来た折には、私達も野を越え山を越えして野営地を訪問した。

サンタ・カタリーナからこのパラナへ移ってきた農民は、自分達のドイツ

語と文化の伝統を維持し、青少年を大都市の影響から守ることの可能な閉鎖的独立会社の建設を目ざしていた。そのために若者を移住地にとどめ、収入のかてを得させようとした。父と子が町で働くような状態であってはならない。その為にも是非ともジードルングの工業施設が必要であった。移住地内で失業者は仕事を見つけなければならない。

ウ．病　　院

病院として利用した農家には10台のベッドを置いた。この農家は当初は移住者の住宅として、またゲスト・ハウスとしてまた労働者の住宅、最後に病院として用いられていた。ここでは近くのパルメイラに在る病院で特別な場合治療を受ける事も出来たが、この病院は1976年にようやくレントゲン設備を導入した。当時は健康保険制度も整っていない状態であった。重病で手術を要する患者の場合は、クリチーバ市の病院「サンタ・カーサ」や医療設備で無料で治療して貰えた事は誠に有難い。この時に知己になった教授や医師とは今でも親交がある。

この３～４年間のあいだにウィトマルスンは全く別のもののように変化した。まず我が移民達の経済状態が著るしく好転したこと、これらの人々は個人で全ての治療費を支払う能力がある。

第２に全移民が保険に加入しており、他の病院・医療所で保険治療を受けられること。

第３に部落に電話が設置されたこと。第４は全家族が車を所有するようになったこと。近隣都市との連絡道路が全てアスファルト舗装されたことも大きな変貌のひとつだろう。

1935年10月から1976年10月まで、両方の「ウィトマルスン」を通じて病院の為看護婦として働いた人々を想起してみょう。

マンヤ・デュック、アンニ・エディーガー、マリー・ボシュマン。アンニは２～３ケ月で病気に罹ってしまいサン・パウロへ帰った。マリー・ボシュマンは1936年３月29日到着、アメーバ赤痢による肝臓障害の為1936年４月20日逝去した。この２人の看護婦は一緒にロシアからカナダへ渡ったが、ウィ

トマルスンに病院を建てる話を聞き、建設に協力する為やってきたのであった。続くマルタ・シュトライトは3ケ月留るに過ぎず、代ってタレア・ハージャか来た。1937年11月28日、病院の落成式が行われ、沢山の人々の出席により賑やかに祝われた。祝辞を戴いた方々は、Fr. クレーカー、D. ニッケル、ローゼンフェルト翁である。引き続き婦人会の手作り品の競売が始り、利益は全て病院に寄付された。午後は学校で礼拝が行われた。この日は丁度ロシアから脱出した記念すべき日でもあった。

サンタ・カタリーナおよびパラナでも常に婦人達の寄与によって病院は大変助かっている。私達は今日まで彼女達の好意を忘れる事ができないのである。1937年には我が移住地に賓客が来訪した。サンタ・カタリーナ駐在領事Dr. シュタイナース、及びブルーメナウ・ドイツ人学校校長Dr. スロツカである。領事は病院への寄付を約束した。それは大きな喜びであった。

病院に奉職した看護婦名を列記しょう：マリア・マルティンス夫人、ウェラ・ヤンセン、ウェラ・レギーン・ヤンセン、フリーダ・ハッケ、エルサ・クルビュウェイト、マリア・ペナー・ヤンセン、アンナ・エック、レンペル。特にマリア・ヤンセン及びアンナ・レンペル両看護婦は助産婦資格を取得してくれた事は非常に助けとなった。というのもブラジルでは助産婦にはめぐり会えないものであったのである。

エ. 回顧と展望

1952年5月10日、パラナ・ウィトマルスンにおける最初の逝去者が出た。ペーター・クヴァップは息子と共に移住地で働き、家族は未だサンタ・カタリーナに留っていた。我が移住地には墓地が築かれておらずクリチーバに埋葬しょうと試みたが出来ず、中央広場近くの小高い丘の上に適当な場所をみつけ墓地とした。後にここにメノー派教区礼拝堂が建てられた。ここに最初の死者は埋葬された。

今日、ウィトマルスンの土地は全て分割され買い尽くされ土地価格は上昇している為、若い世代はこれ以上入植する事ができない。ウィトマルスンから遠く離れた土地の借地耕作を試みる農民は多いが難しい。年配者の生活は

安定している為、多くの若者が市へ出て働く傾向が高まり、そして彼らは都市での生活に満足している。逆に村では若者の労働力が不足する様になった。そこでその対策としてサンタ・カタリーナの貧しい住民や周辺の住民を労働者として雇用する事になった。農民は移り住み、外国人労働者の家族が定着し、乳業を営んだ。現在ウィトマルスンの住民の一部は外から移り住んだ人々である。

他方、農業を志望する我々息子達の現状は殊の外厳しいものである。土地の賃貸は一時しのぎに過ぎない。問題の解決は時が経てば経つほど複雑になる。移住地の土地を持たない人々の経済状態を解決することが望まれるのである。

Dr. ペーター・デュック

(14) パラグアイからブラジルへ

デビッド・ヤンセン

難民としてソビエト・ロシアから脱出し、カナダへの入国の途を拒まれ、南米へ渡るしか方法がなかった我々をむかえ、援助の手を差しのべてくれたドイツに今でも深く感謝している。

我々はパラグアイとブラジル両方の入国許可を得た。チャコ地方の蒸せ返る様な暑さ、乾燥した土地を開拓する困難さを我々は実際に見るまで知る由もなかった。しかし、勤勉と絶ゆまぬ労働の結果、神は生存基盤を与えて下さった。幸いパラグアイ東部フリーストラントに移住地を建設する事に成功した。この地は作物に適度な雨量があり、気候も温順であった。しかし、ブラジルの豊かさに比べるとパラグアイの生活水準は甚だ低いものであった。

私は25年間精魂を尽くして我がフェルンハイムの建設に協力してきた中で、多くの経験を得た。その後、私はブラジルに行く機会に恵まれ、ウィトマルスンで生活する事になった。ウィトマルスンの自然は驚く程耕作に適していた。ウィトマルスン高地は山と渓谷から成っていた。水源と川がコロニーを貫流している。ファゼンダ購入の経過についてはこの本で詳しく述べる所であろうから触れないが、よくこんな素晴らしい所を捜したものだと感心する。

私は今年でウィトマルスン住人となって25年になる。私は毎日牛乳をクリチーバへ運搬し販売している。

銀行から低利子で金を借り、農業用機械を購入することができ、この10年間というもの仕事はいつも大繁盛である。多くの外国に住む友人の激励を受け、また政府高官の鼓舞見舞をいただき、我々は国家の為に忠誠を誓いブラジルの建設に共に尽くすのである。

我々の父達のロシアでは考えられないような信教の自由がこの国では認められている。教区の布教活動は至る所で進められている。私は当地へ来て1週間にならぬうちに新教メノー派教区の工事班と共にウィトマルスンから70㎞離れた山村マット・ブレート、ラパ地方に学校の建設に参加した。私にとってまさに実り豊かな一週間であった。仕事は日々あっというまにはかどった。フランツ・ウンルーの家族を訪れては人々は一夜をキリストのためにと決心するのである。我々には広大な国土ブラジルへの門戸がアマゾン地域まで開かれている。新教メノー派教会はパルメイラで布教活動を行い、AMASが幼児ホームを開き、ウィトマルスンは助成をしてきているが、150人の幼児が毎日世話を受け、給食と教育を受けている。

我々メノー派同胞教区（ウィトマルスン）はカンポ・ラルゴに教区駐在所を建て、青年及び説教師の奉仕に助けられ、牧師による礼拝献辞を行っている。またこの他、クリチーバおよびサンタ・カタリーナのドイツ人移住地でも我同胞教区を建設することができた事は誠に嬉ばしい。神の国が永遠に栄えんことを!

(15) 25周年を祝して

ウィトマルスンにおいてこの度25周年が祝われた事は誠に喜ばしい事である。これは我パラナ州の厳しい不屈の歴史の一画である。25年間に及ぶ闘い、犠牲、忍耐、献身の賜として、障碍は克服され、難問は解決された。蒔いた種は芽を吹き、成長し、豊かな実りをもたらした。

ウィトマルスンの生活は、現代人が心の底から求めているものである。田園地帯での自然と町の文化とを同時に味う事のできる生活。四季折々の草木が観られ鳥の鳴き声を耳にする事ができ、都会の汚れた空気、交通地獄から解放さ

れる一方で、現代文明の成果たる電化生活をも営み、また自動車、農業機械を駆使し豊かな生産を上げ、立派な道路があり、快適な家々が建ち並ぶ。

開拓者の夢は今日現実となった。今後もさらに若い世代の努力によって溢れ発展していく事を期待する。

この発展の基礎となったのは学校である。「ヨハネス・ヤンセン」小学校及びフリャツ・クリーヴァー・ギムナジウムは児童生徒を生活能力のある人間に育てるという大きな使命を持つ学校である。現在、この学校は教師P.パウルス・ジュニア及びジーグハルト・エッブ両名に統率され、若者に新しい世界への途を開いてやる熱意に満ちている。

このウィトマルスン25周年の祭典に際し、我々カンポ・ラルゴ教育当局から、学校責任者、全ての教員・生徒、並びに全ウィトマルスン移住地区住民の皆さんに心からお祝いの言葉を申し上げると同時に、偉大な業績を久しく記念し称えるものである。今後は今まで以上に発展されることを期待している。

アントニオ・ミカリノ・ブレイラ

地方視察官

オスワルド・アンドラ・デ・サノト

上級視察官

(16) カンスラーウィトマルスン

1. 家畜群、牡牛、長い角、河、森、田畑、牧草地、松、ヤシ、灌木、アレグレーテ、ソノを経てドンロベルト帝国カンスラへ！
2. 野鹿が跳び回り、ガラガラヘビ、野ウサギ、モグラ、獅子にも出くわす。
3.〜4. 静けさを破るは、開拓者の斧や鍬の音、命を投げ打ってファゼンダのコロニー化に励む。空にはオオタカが円を描き、地上はトラクターのうなる音
5. カンポ・ゲライスの夢は消え、人々はクラウェルからやって来た。
6. 道路、村、菜園、全てが起きて活動している。牧師も到着、いよいよ新しい時代だ！
7. 古い貧弱な小屋で始つた学校。フリッツ・クリーヴァーは熱意に燃えた授

業

8. 石の谷と呼ばれた我がカンスラ・ウィトマルスン！貧者に日々の糧を恵んでやる。

9. 牡牛に代ってホルスタイン乳牛、白色の金がまぶしい。仕事・犠牲の報酬は充分有り。

10.～11. 団結力は溢々強固に、信念・合言葉を共に、初期の生存闘争の勝利の秘密はここにある。部落総力を揚げて野焼きする。猛煙・猛火が怪物の様に荒れ狂う。

12. 夜ともなれば火の海が処々に振れ動き、火柱が天高く舞い上る。そして次第に闇となって消えて行く。

13. 樹冠の雄姿は何と夢心をさそうものであろうか。炎に包まれた野の上を風がヒュウヒュウ吹きすさむ。

14. 墨を流した様に一面黒々とした景色。だが、見よ、驚くじゃないか。そこに青々とした緑の絨緞が広がるではないか！

15.～17. パラナ・ウィトマルスンよ、記念祭を迎え、祝福に満ちた我が新故郷パルメイラのステップ地域に生まれた穀倉地帯、称えるべきは神であり、神の恩恵と慈愛である。全ての創造主である神よ、ウィトマルスンの今日あるのは偏に神の御助けある為。

ペーター・パウルス・ジュニア

(17) 輝く星の下で

夏の夜、耳を澄ますと、森の方から鳥の鳴き声や、木葉のカサカサすれ合う音が聞こえる。遠くでは見張りに立つ犬の遠吠えがする。

夜空を見やると、数千の星がきらきら輝き静かなウィトマルスンの上を照らしている。

夜空の星が電光の如くまたたく様に、私の脳裡に過去の思い出が、いや我が歴史の一画が浮かび上るのである。私は星の歌を口ずさむ：『星を見上げ、岩壁に立ち、賢者に導かれ、規範を守り、日々の糧を得、泉で安息し、目的に向って励む、これ全て神の業！』

この詩の中に、我々の歴史の奇跡の秘密が在る。丁度、イスラエルの民が天の星に導かれて砂漠を越えて神の国に至ったように、我々の歴史も星に導かれここまで形成されてきた。侮辱と迫害に悩まされた再洗礼派信者達が生き残る事ができたのは奇跡に違いない。ロシアから追放された者達が勝利できたことはどうだろう？

星の導く我が道はどこへ向っているのだろう。我々は知る由もない。しかし我々は星を信じて進むべきであり、またその覚悟である。

今、私はウィトマルスンを覆う青い星空を見つめながら自問する。我々は、自由を獲得する為、この美しいブラジルを故郷とする為、土地を耕し、共同体に奉仕し、このジードルングを建設するのにどの様な力を与えることができただろうか。

勿論、開拓当初の苛酷さは「死・窮乏・惨」の言葉で表される程ひどかった。今日、豊かな生活を送る事ができる様になった我々が取り組むべき問題は、何を犠牲にすれば、他の人々の生活をより良くすることができるかである。

幸い、バージェ、クリチーバ、ウィトマルスンは適切な教授陣を擁する良い中等学校を有し、共同組合のおかげで重要な農業中心地に成長した。メノー派教区の布教活動も、この国の信教の自由に助けられ強い影響力をもつようになった。

我々はこれらの繁栄が神からの贈り物である事を忘れてはならない。我々はジードルングの25周年を記念して、1977年3月4日～6日を特に記念日として祝うものである。

神の恵みを思い
今後も良い星の導きに
従って進む……

JICA